

大学教育開発研究シリーズ  
NO.19 ● Oct. 2013

# 「読む」学生が育つ大学教育を求めて

—若者の読書実態と授業実践を始点として—

立教大学  
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

# 「読む」学生が育つ大学教育を求めて

—若者の読書実態と授業実践を始点として—

---

立教大学

大学教育開発・支援センター

## はじめに

---

若者が本を読まなくなったと言われて久しい。本を読まなければ文章は書けない、レポートも書けない、卒業論文はさらに難しくなる、というのは、今日の学生に対する大学教員の共通認識である。もちろん中には読書好きの学生もいるのだろうが、平均すると今の学生は本を読まなくなり、文章を書けなくなっているというのは、様々な場で報告されている。今回のシンポジウム『「読む」学生が育つ大学教育を求めて』は、その本を読まなくなったと言われていた学生の現状を知り、これに対して大学教育として何ができるか、という問題意識で組織されたものである。

最初に本学の経済学部准教授であり、大学教育開発・支援センター副センター長である小澤康裕先生より、今回のシンポジウムの趣旨説明を行っていただいた。確かに一般的には読書量は減少を続けていることは確かなようであり、同時に蔵書も少なくなっているという報告があった。しかし立教大学の図書館の利用率は高まっており、貸し出し冊数も増えている。適切な環境があれば、若者も本を読むようになるかもしれないという。

このような問題意識から、まず基調講演として、現在、公益財団法人「文字・活字文化推進機構」の理事長であり、大阪樟蔭女子大学の教授でもある肥田美代子先生に登壇いただいた。肥田先生は自ら童話をお書きになり、童話作家としても有名な方であり、主な作品に「ふしぎなおきゃく」、「山のとしょかん」、「ゆずちゃん」などがある。同時に国会議員としても活躍なされ、在職中に読書に関連する法律、「子どもの読書活動の推進に関する法律」、「文字・活字文化振興法」の制定に尽力されている。最近、子どもの読書に関する調査研究の報告書を出されたばかりであり、この調査研究の結果を前提にお話いただいた。肥田先生の報告では、今や企業からも若い社員は文章が書けない、報告書が書けない、という指摘があるような状況になっており、これらは若い時期の読書が少ないことによるものであると推察できるという。この問題は大学を始めとする学校教育のみならず、図書館のあり方、企業が求める人物像まで含めた、社会全体で考えるべき問題である、との報告であった。

続いて、本学で読書を核とした授業を行っている二人の先生に、それぞれの実

---

践事例を報告していただいた。法学部の安藤裕介先生には、法学部の1年生を対象とした授業「基礎文献講読」の事例を報告していただいた。また、経済学部の中島俊克先生には、全学共通カリキュラムの中で、「総合科目」の中の読書を核とした授業「領域別B」（文献系）を責任者として組織した経験をお話しいただいた。この科目群はそれぞれの領域の古典や重要文献を専門の教員の指導により読むという趣旨のものだが、中島先生には、自らの授業の実践ばかりでなく、他のいくつかの科目の状況も報告していただいた。

お二人からはともに、古典とでもいべき文献を読ませる苦勞が語られたが、それがうまくいって学生に読書の楽しみを教えることができる場合があり、またそのためには様々な「仕掛け」が有効であることも報告された。

最後のディスカッションの時間ではフロアからの質問・コメントが続いた。今回のシンポジウムのテーマは、特に明確な結論が出るような問題ではないのだが、大学という場において、学生の読書について問題意識を深めていただければ、その意義はあったのだろうと思っている。

図書館長、観光学部教授

**豊田 由貴夫**

はじめに	
プログラム	9
趣旨説明 小澤 康裕 氏	11
【スライド①】	16

## 第1部：講演

<b>読書は書く力、考える力、伝える力を育てる</b>	25
	肥田 美代子 氏

はじめに	25
1. 文字・活字文化推進機構の発足 ―言葉の力を求める各界の声を受けて―	26
2. 子どもの読書活動推進法	28
3. 文字・活字文化振興法とPISAショック	29
4. 読む力は言葉の力	31
5. 実態調査からみえてきた読書経験の効用	32
6. 小・中・高・大の橋渡しが問題	33
7. 教師に求められる本に誘う力	34
8. これからの課題	35

## 第2部：事例報告

<b>古きを読んで新しきを考える</b>	
―『基礎文献講読』における取り組み紹介―	41
	安藤 裕介 氏

はじめに	41
1. 法学部「基礎文献講読」の紹介	42
2. ものの見方・考え方を培うために読む ―2冊のテキストによる授業実践―	43
3. なだいなだ『権威と権力』	46
4. 中江兆民『三酔人経綸問答』	47
5. 学生に求めること	48
1) 問いながら読む	
2) お化けと格闘するな ―理解にもとづく批判を―	
6. 学生たちの反応	50
1) 現代に通じることへの驚き	
2) 新しい本を読みたい	
3) サプリメント化された知を求めている	
7. 良い本は消費も消化も容易にされないもの	51
【スライド②】	54

## テキストの森への誘い

—全カリ領域別B科目を担当して—	59
------------------	----

中島 俊克 氏

はじめに	59
1. 全カリ（全学共通カリキュラム）の変遷と構成	59
2. 全カリ総合「領域別B科目」の特徴	61
3. 履修と単位修得の状況	62
4. 領域別B科目の課題 —担当教員アンケートの結果から—	62
5. 授業スタイルの事例紹介	64
1) 多読型か精読型か	
2) 読む要素を加えた入門講義	
3) 輪読	
4) グループ学習	
6. 話すために読む、書くために読むというサイクルの確立が大事	69
質疑応答・ディスカッション	71
閉会挨拶 西原 廉太 氏	90

**「読む」学生が育つ大学教育を求めて**  
—若者の読書実態と授業実践を始点として—

2013年6月19日（水）開催  
シンポジウムの記録

## プログラム

# 「読む」学生が育つ大学教育を求めて

—若者の読書実態と授業実践を始点として—

趣旨説明 小澤 康裕 氏

(大学教育開発・支援センター 副センター長、経済学部准教授)

第1部：講演

**読書は書く力、考える力、伝える力を育てる**

肥田 美代子 氏

(公益財団法人 文字・活字文化推進機構 理事長)

第2部：事例報告

**古きを読んで新しきを考える**

—『基礎文献講読』における取り組み紹介—

安藤 裕介 氏 (法学部助教)

**テキストの森への誘い**

—全カリ領域別B科目を担当して—

中島 俊克 氏 (経済学部教授)

質疑応答・ディスカッション

閉会挨拶 西原 廉太 氏

(大学教育開発・支援センター センター長、副総長、文学部教授)

司 会 豊田 由貴夫 氏 (図書館長、観光学部教授)

**日 時** 2013年6月19日(水) 18:20~20:30

**場 所** 池袋キャンパス M202教室 (マキムホール2階)



# 「読む」学生が育つ 大学教育を求めて

—若者の読書実態と授業実践を始点として—



司会

図書館長、観光学部教授

豊田 由貴夫 氏

○司会 それでは、時間になりましたので、始めさせていただきます。

本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。立教大学、大学教育開発・支援センター主催によりますシンポジウム、「『読む』学生が育つ大学教育を求めて」を開催させていただきます。副題を「若者の読書実態と授業実践を始点として」とさせていただきます。

私は、本日司会を務めます、図書館長の豊田です。よろしくお願いいたします。

では、早速ですが、本日のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。趣旨説明は、大学教育開発・支援センターの副センター長、経済学部所属の小澤康裕先生をお願いいたします。

## 趣旨説明

○小澤 皆さん、こんばんは。大学教育開発・支援センター、副センター長の小澤でございます。本日は、お暑期中お集まりいただきまして、ありがとうございます。残念ながら、空調は集中管理ですので、これ以上、温度を下げることはできませんので、もしかしたら、少し暑苦しいかもしれませんが、少し我慢をしていただきまして、シンポジウムを楽しんでいただければと思います。

初めに、私からこのシンポジウムの開催の趣旨を簡単にご説明させていただきますと思います【スライド①-2】。まず、読むというのは、大学だけではなくて、あらゆる学びを構成する一番大きな柱であろうと考えられます。大学では、特に卒業論文を書く、レポートを書くという形で、読んだことから考えて、そして書くというプロセスを経る作業を、ほぼ初めてやり始めるようになります。高校ま

でになかなかやってこなかったことなので、学生が意外につまづくポイントになっています。この読む、考える、書くという一連のサイクルは、大学在学中繰り返し行われ、繰り返される中で徐々に高い水準で行われるようになります。そしてそのなかで、知識や能力の向上が生じてくるのだと思います。このようなイメージをもって、実際に学生にレポート課題を出すのですが、今の学生さんはやはりなかなか書けないですね。その書けない理由を少し考えてみると、まず読めていないのではないかとこの点に考えが至りまして、今回は、この読むということテーマにシンポジウムを開催しようということになりました。

昨年度に私が担当した「立教ゼミナール」という授業は、1年生から4年生まで、全学部全学科の学生がとれる授業なのですが、学部学科に関係なく、やはり読んでいる量が少ないということがよく分かりました。特に、まず本を持っていないということが衝撃的に明らかになりました。30人の授業なのですが、その学生に、蔵書を何冊持っていますかと聞いたら、多い人は100冊以上持っていて、きちんと読んでいるなという印象がありましたが、一番少ない人は2冊。18年以上生きてきて、たった2冊しか自分が買って持っている本はないという答えだったのです。漫画などは除いた、一般的な書籍を何冊持っていますかと聞いたら、一番少なかったのは2冊でした。やはり、読むという経験があまりないのだろう



大学教育開発・支援センター 副センター長、経済学部准教授  
小澤 康裕

なということが非常によく分かりました。

実際、その「立教ゼミナール」という授業の中で、先ほど入り口にも置いてありましたが、「Master of Writing」というレポートの書き方をまとめた資料を使って、これを見ながらレポートを書いてくださいという課題を出して、何度か途中経過も含めて指導をしていったのですけれども、引用文献に挙がってくるのが、文献ではなくてURL。1冊も本を読まずにレポートを書こうとする学生がかなりいました。それを見るにつけ、やはり読むということを日常的にしていけないのではないかと考えました。

大学生協の調査によりますと、大学生の1日の平均読書時間というのが、1991年から見ていきますと、下がり続けているということが分かります【スライド①-3】。ほかにもほとんど本を読まないという人の割合が増えているという資料があります。このベネッセ教育研究開発センターの資料によりますと、2008年と2012年の比較ですが、一番左側のところは0時間。1週間のうち全く本を読まないという学生が増える傾向にあって、読書時間が全体的にも減っている傾向がよく分かります【スライド①-4】。

また、小中高生ですね。大学生ではなくて、その前の段階の小中高生について見てみると、この一番左側の読書を「しない」という子どもが、学年が上がるほど、小学生、中学生、高校生と年齢が上がるほど増えているということが分かります【スライド①-5】。

立教大学の学生はどうかなということでデータを探してみますと、例えば、大学に入ってよかったこととして、「本を読む機会が増えた」という項目を選択した学生の割合は、2010年の調査でやや減っています【スライド①-6】。ただ、私大連の調査なので、私大連全体と立教大学を比較してみますと、2002年、2006年、2010年、いずれの年においても私大連全体よりは立教大学のほうが「本が読む機会が増えた」を選ぶ学生は多い。図書館・コンピュータ室で過ごす時間に関しても同様です【スライド①-7】

図書館の利用状況ですが、入館者数は2007年以降、増加傾向にあります【スライド①-8】。ただこの間、学生数も増えているので、これだけで一概に学生が図書館に来るようになったとは言いきれません。しかし、池袋キャンパスの図書館が2012年11月に新しくなって以降は、入館者数も貸出冊数もしっかりと増加しています【スライド①-9】。新図書館ができて以降、前年度同期比をとると、

141%、144%、185%と入館者数は確実に増えていますが、貸出冊数もおおむね毎月120%以上になっていて、学生が図書館に来て本を借りるようになっていくという、非常によい傾向が見られます。

学部学生1人当たりの貸出冊数をみても、2007年度から2012年度にかけて、継続的に伸びてきておりとてもよい兆候が見られます【スライド①-10】。ただし、これは1年間に学生が何冊本を借りているかというデータです。2007年は、1年間に学生は1人当たり5.5冊しか借りていません。だんだん増えてきてはいますが、2012年度はそれでも8.8冊。つまり、平均すると1カ月に1冊も本を借りていないという状況です。やはり十分に本を読んでいるとはいえないのではないかなと思います。ですが、先ほど一番初めに話しましたとおり、大学ではレポートを書くとか、卒業論文を書くという作業をしなければいけなくて、そのために本を読むというのは、必然的に必要なことだろうと思います。

このような状況を踏まえまして、今回は読むということに焦点を当てて、シンポジウムを開催させていただきます。できるだけ学生に本を読んで、考えて、そして文章を書くという作業に取り組んでほしいと思っています。読む学生が育つ大学教育というのは、どのように実現することができるのだろうかということ、今回皆さまと議論したいと考えております。




第1部では、肥田美代子先生に、「読書は書く力、考える力、伝える力を育てる」というご講演をいただきまして、その後、第2部で、本学の中から事例報告としまして、読むことを核とした授業実践の成果と苦労について、安藤裕介先生と中島俊克先生にご報告をいただきたいと思います。その後、フロアの皆さまと質疑応答、ディスカッションをさせていただく予定です【スライド①-11】。

それでは、8時30分まで、長丁場になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 小澤先生、ありがとうございました。

【スライド①-1】






立教大学

「読む」学生が育つ大学教育を求めて  
—若者の読書実態と授業実践を始点として—

2013年6月19日  
大学教育開発・支援センター 副センター長  
経済学部 准教授  
小澤康裕

【スライド①-2】

シンポジウム開催趣旨  立教大学

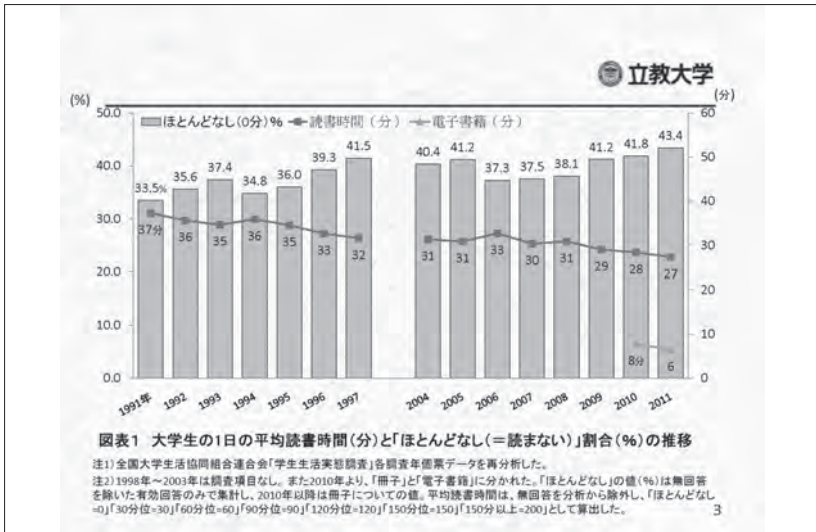
- 「読む」ことは「学び」を構成する大きな柱
- 「読む」 「考える」 「書く」(recursive process)

—事実—

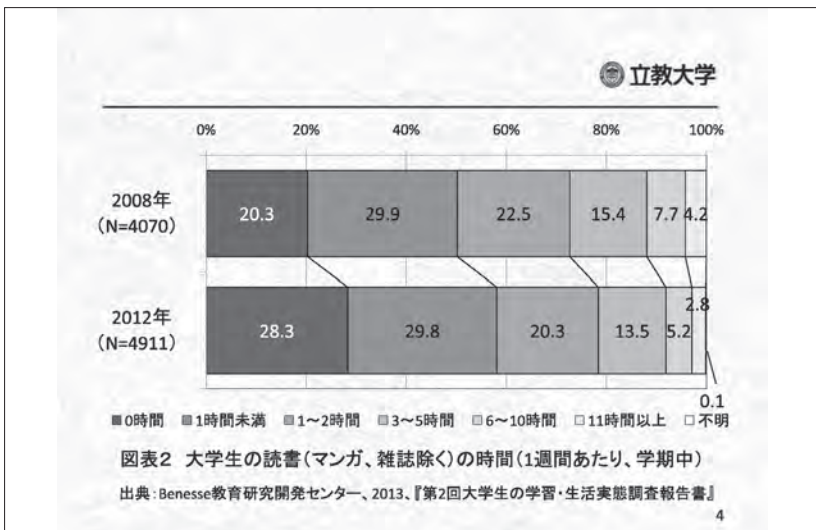
- 大学生の蔵書の少なさ(『立教ゼミナール』)
- Master of Writingを用いたレポート作成指導
- 大学生の読書量は減少を続けている

2

【スライド①-3】



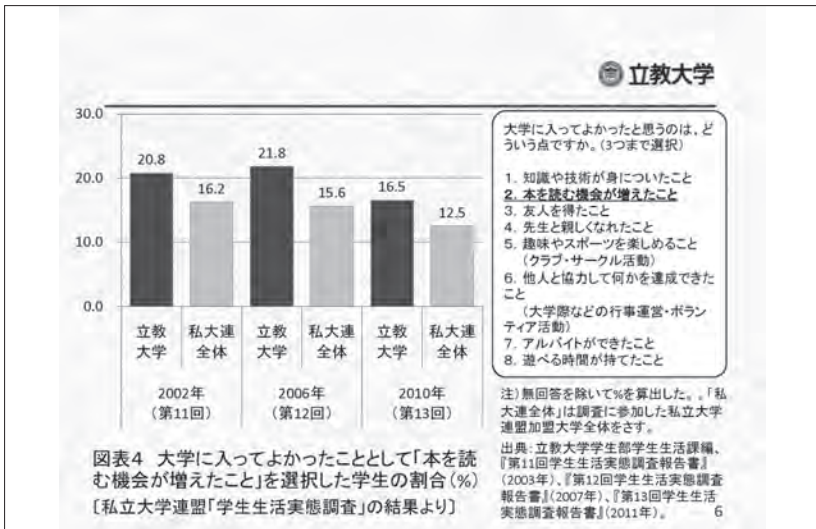
【スライド①-4】



【スライド①-5】

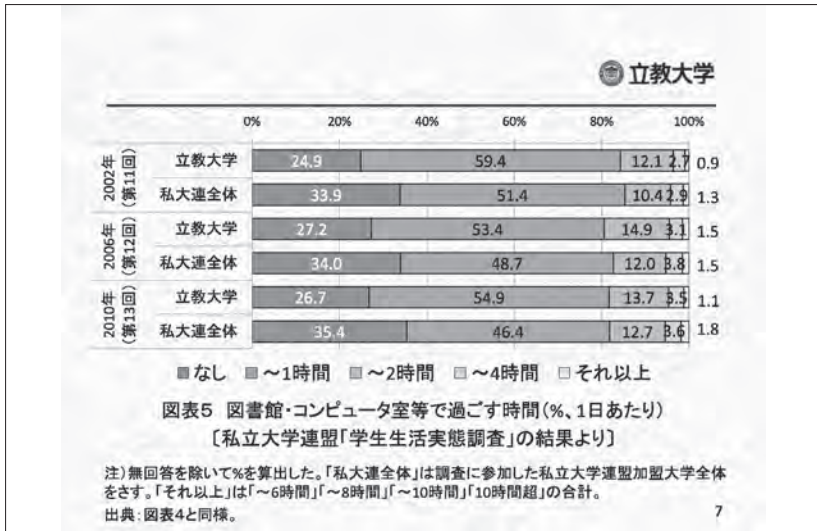


【スライド①-6】

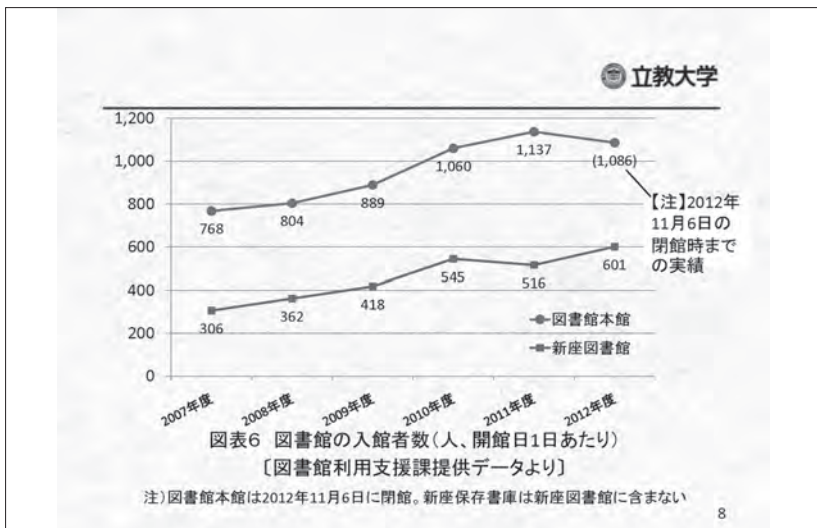




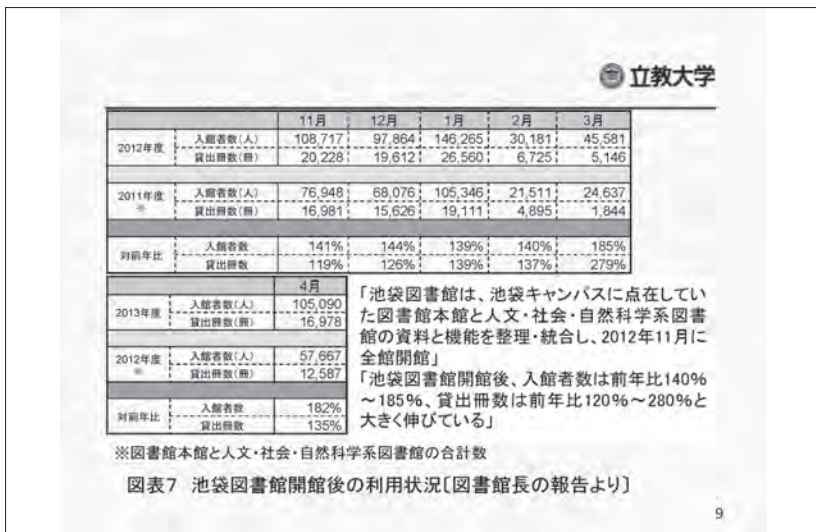
## 【スライド①-7】



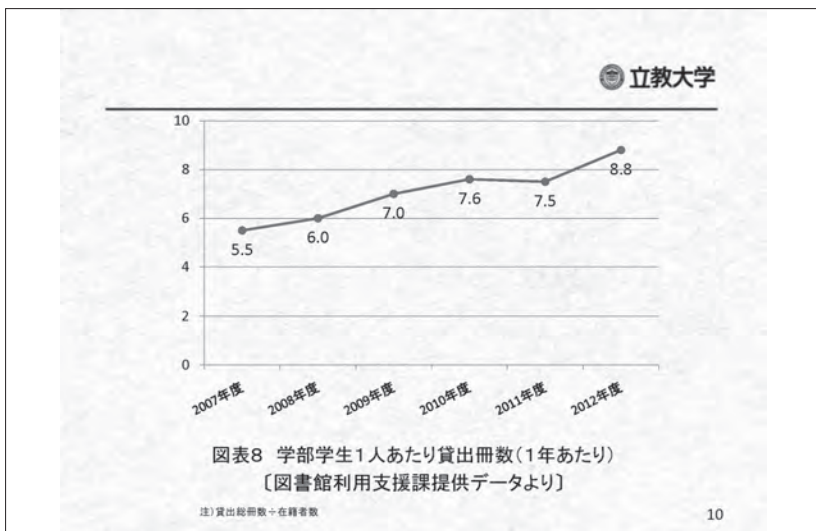
## 【スライド①-8】



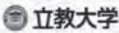
【スライド①-9】



【スライド①-10】



【スライド①-11】

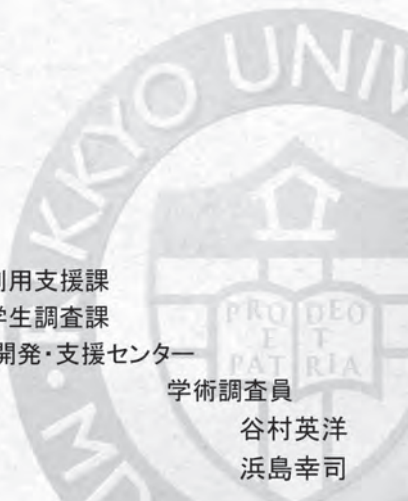
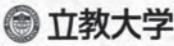


---

- 第一部<講演>  
肥田美代子氏(文字・活字文化推進機構理事長)  
「読書は書く力、考える力、伝える力を育てる」
- 第二部<事例報告>  
読むことを核とした授業実践の成果と苦勞  
安藤裕介氏(本学法学部助教)  
中島俊克氏(本学経済学部教授)
- 質疑応答・ディスカッション

11

【スライド①-12】



協力

立教大学 図書館 利用支援課  
立教大学 学生部 学生調査課  
立教大学 大学教育開発・支援センター  
学術調査員  
谷村英洋  
浜島幸司

# 第 1 部

---



[講演]

## 読書は書く力、考える力、 伝える力を育てる

公益財団法人 文字・活字文化推進機構 理事長  
肥田 美代子 氏

○司会 続きまして、本日の基調講演に移らせていただきます。基調講演は、先ほど小澤先生からも紹介がありました肥田美代子先生にお願いしております。

私のほうから、簡単に肥田先生のご紹介をさせていただきます。肥田先生は、現在、公益財団法人文字・活字文化推進機構の理事長であり、大阪松蔭女子大学の教授でもあられます。最初に紹介しなければいけないのは、肥田先生は児童文学作家、童話作家でいらっしゃいます。作品としては、『ふしぎなおきやく』、『山のとしょかん』、『ゆずちゃん』、『おやすみなさいのおともだち』など、既に五十数冊の著作があります。皆さまの中にも読んだ方がいらっしゃるかと思います。

それからもう1点、先生は国会議員として活躍されて、教育、あるいは読書に関する法律の制定などにご尽力されました。参議院、衆議院で計15年間在職なさって、子ども図書館の設立、子どもの読書活動の推進に関する法律、文字・活字文化振興法の制定などにご尽力されました。

最近、子どもの読書に関する調査研究をまとめられまして、その報告書が出たばかりです。今日のお話では、その成果もお話いただけると期待しております。それでは、肥田先生、よろしく願いいたします。

### はじめに

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました肥田美代子でございます。皆さん、遅くまで勉強されるのですね。私は数人しかいらっしゃらないと思って来たのですが、こんなにたくさんいらっしゃるとは意外でございました。

---

今、司会の先生から私の事をご紹介いただきました。あれを聞かれたら、このおぼさんは一体何がしたいのだろうと思われたと思います。薬剤師の時期もありましたし、童話を書いてもいましたし、国会で仕事をさせていただいた時期もありました。また3人の子どもの母親でもあります。人生何が起きるか分からないということで、ご理解いただけたらと思います。

資料について、少し説明させていただきます。「読書推進—23年間の動き」というのがございますが、これがだいたい国会を中心にこれまで進めてきた事業です<次頁参照>。

それから、「子どもの頃の読書は豊かな人生への第一歩」<sup>[1]</sup>。これが先ほどご紹介いただきました今回の読書調査の結果であります。現在新しいパンフレットも作成中です。

それから、ビブリオバトル。これはなかなか面白い。東京都知事の猪瀬直樹さんが、言葉の力再成プロジェクトで行っておられます。4年前から「ビブリオバトル首都決戦」という名称で、私どもの財団と共催しております。これは、後でご紹介いたしますが、ゲームとしてなかなか面白いものでありまして、それが読書に結びつけばいいなというものでございます。

## 1. 文字・活字文化推進機構の発足 —言葉の力を求める各界の声を受けて—

まず、私どもの機構の紹介を致します。私ども文字・活字文化推進機構というのは2007年に発足いたしました。理事長をしておりますが、これは決して天下りではございませんで、15年間の国会議員生活を終えまして、2年間の準備期間をもって2007年に発足したものでございます。この機構は何をするかといいますと、子どもの読書活動推進法と文字・活字文化振興法という2つの法律を具現化するという目標をもっています。子どもの読書活動推進法は2000年に、文字・活字文化振興法は2005年に、いずれも議員立法で成立いたしました。

機構の構成メンバーでございますが、会長が資生堂の名誉会長の福原義春さん。

---

[1] 次のURLで参照可（2013年9月18日確認）。  
<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/72/File/dokusyo.pdf>

## 《読書推進—23年間の動き》

1989年	「子どもの権利条約」採択(国連)	
1990年	「子どものための世界サミット」開催(国連)	
1992年	全国学校図書館悉皆調査(文部省)	
1993年	学校図書館図書整備5か年計画 開始(文部省) (2006年迄毎年100億円～130億円)	子どもと本の議員連盟
1997年	「学校図書館法」改正(国会)	
1997年	「子ども国会」開催(国会)	
1999年	「2000年子ども読書年決議」(国会)	国際子ども図書館設立推進議員連盟
2000年	「国立国会図書館国際子ども図書館」設立(開会)	
2001年	「子どもの読書活動の推進に関する法律」制定(国会)	子どもの未来を考える議員連盟
2001年	「子どもゆめ基金」設置(国会)	
2001年	「再販制度」当面存置決定(公取)	活字文化議員懇談会
2005年	「文字・活字文化振興法」制定(国会)	活字文化議員連盟(懇談会を改組)
2007年	新学校図書館図書整備5か年計画 開始(文科省) (毎年200億円)	子どもの未来を考える議員連盟
2007年	文字・活字文化推進機構設立(民間)	新聞、出版、教育、経済、医療、 労働等民間団体、個人 子どもの未来を考える議員連盟 活字文化議員連盟、図書議員連盟
2008年	「2010年国民読書年決議」採択(国会)	子どもの未来を考える議員連盟 活字文化議員連盟、図書議員連盟
	「国民読書年宣言」	全国民
2010年	「国民の読書推進に関する協力者会議」発足	文科省 福原義春氏(座長) 民間委員16名
	「絵本・日本プロジェクト」発足	文字・活字文化推進機構
2011年	「国立国会図書館の書誌データ」(JAPAN/MARC) の無償提供開始	日本図書館協会 全国学校図書館協議会 文字・活字文化推進機構
	「学校図書館活性化協議会」発足	子どもの未来を考える議員連盟 学校図書館整備推進会議 文字・活字文化推進機構
	「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究会」発足	国立青少年教育振興機構 秋田喜代美氏(座長) 民間委員10名
2012年	「印刷文化・電子文化の基盤整備に関する勉強会」 (通称「中川勉強会」) 発足	文字・活字文化推進機構 中川正春衆議院議員(座長) 委員21名
	新学校図書館図書整備5か年計画(文科省)	子どもの未来を考える議員連盟
2013年	「出版物に関する権利検討委員会」発足	文字・活字文化推進機構 福原義春氏(委員長) 19団体出席

注) 肥田美代子氏 配布資料より転載

---

副会長が、今、山梨県立図書館長をやっておられます作家の阿刀田高さん。その他、いろいろな方が名前を連ねております。実はこの機構をつくりますときに、新聞各社のトップの皆さんや、出版界の皆さん、そして医師会、歯科医師会、薬剤師会にも声をかけました。セブンイレブン、トヨタ、アサヒビール、電通、博報堂にもお邪魔しました。

最近、若者の言葉の力がずいぶん落ちているのではないかという話をしますと、皆さん異口同音に、「そうだ、そうだ」とおっしゃるのです。ある会社の社長さんは、社長訓示で、「不退職の決意で、頑張ってください」と言ったところ新入社員がポカンとしている。後で「私の挨拶が分からなかったのか」と聞いてみたら、「不退職」の意味が分からなかったと。日報や報告書がちゃんと書けない社員。ある会社では、顧客対応が大変まずくて、そのために研修をしたとか。社内でのコミュニケーションができないという社員も多いらしい。これは、会社ばかりではなくて、あの国会図書館にもあるようで、コミュニケーションがとれなくて心を病む方もあるようです。新聞記者が、情報のつなぎ合わせの記事だけで、ちゃんとしたものが書けないと。これはある大手の新聞社の社主の話でございます。びっくりしましたのは、医者が患者に対して病状をきちんと説明できないということです。これは大変困ったことで、ドクターハラスメントとも言われ問題になっております。また、政治家の言葉も貧しい。言葉の失敗でずいぶんたくさんの閣僚が辞めていかれました。それから、家族、友人間でも言葉によるコミュニケーションがうまくとれないということがあります。

こういう訳で、私が言葉の力を再成するためにこういう機構をつくりますと説明したら、皆さんが賛成してくださったわけが分かりました。みんな同じ悩みを抱えていたのですね。この問題を何とかしなくてはいけないというところから出発して、7年目に入りました。

## 12. 子どもの読書活動推進法

2つの法律をつくったということについて、説明しなければいけないと思います。1つは、子どもの読書活動推進法ですね。これは2000年に成立しました。ちょうど1990年あたりをピークにして、子どもの活字離れ、本離れがずいぶんと進んでおりました。もちろん大人も読まないという状況もございました。とにか



く読書ということが、学校教育の中でもものすごく低い位置にあったのですね。読書なんかしていたら授業が遅れるよとか、学校図書館なんかにいっていたら、それこそ勉強できないとか、校長先生自体が読書に対してきちんとした認識を持っていなかったのですね。ですから、学校図書館を見て歩きますと、ほとんどの図書館に鍵がかかっている。蜘蛛の巣が張って、かび臭い、本はない。そういう状況が1992年の悉皆調査、全国調査で分かりました。その後、学校図書館法の改正をしたり、国立国際子ども図書館をつくったり、子ども読書年の国会決議をしたりしましたが、どうもそれだけでは納得がいかないのですね。やはり法律をつくらなければ前に進まない、という思いで作ったのが、この子どもの読書活動推進法でございます。これはまさに子どもの読書環境を整備しようというのが主目的です。

### 13. 文字・活字文化振興法とPISAショック

その後、2007年には文字・活字文化振興法という法律が成立しました。そこにいたった背景の一つに、PISAショックがありました。OECDが先進国の15歳の子どもの学習到達度を調査したのですが、2000年には日本の子どもの読解力は国別順位で8位でした。3年ごとの調査でして、2003年になりますと



---

14位、2006年が15位とどんどん落ちてきました。これはもう文科省もびっくりですね。国会でも大変問題になりまして、いろいろな議論が起きました。

フィンランドが一番だということで、国会議員のフィンランド詣でがはやりました。見て帰ってきた人が言うには、「いや、フィンランドは読書をたくさんしている国である」とか、「教師のレベルがうんと高い」とか、「大学院出しか教師になれない」という話もありました。「人口が少ない国だからそういうことができるのだろう」と言う人もいました。

要するに、国中がみんなびっくりしたわけです。一番最近の、2009年の調査では8位にやっとこさ戻ったわけですが、依然として論文式の自由記述は白紙回答が多いようです。このことから、なお読解力は回復していないと見ていいでしょう。

読解力の定義ですが、「本や新聞、雑誌などを通じて得た知識や情報を再編成して、自分の考えを加えて、新しい知恵や価値を創造する力」。要するに、学問あるいはすべての社会活動の基礎的な力と定義しているのですね。読解力というと、日本ではだいたい今までは単なる国語の能力として理解されてまいりましたが、そうではなくて、これは社会活動を支える、基礎的な言葉の力というべきでしょう。

では、どうして、日本が14位、15位とレベルダウンしたのかということです。どうやらヨーロッパでは、この急激に変化する社会状況の中で、教育の形を変えなければいけないといち早く気がついたらしいということです。ですから、教育の形をどんどん変えていったわけです。ところが、日本はまだそこまで気がつかない。気がついた人がいても、文科省がなかなか大転換ができない。今までのように答えは1つ、暗記をたくさんしたらその子の成績はよくなるという教育の形にまだこだわっていたわけですね。批判力とか思考力を育成するという教育になっていなかったということです。日本の教育改革は、ヨーロッパの国々と比べて出遅れたのです。

ですから、これからが勝負だと思うのです。全国学力テスト。あれも国語はA問題とB問題をつくっていますね。B問題が読解力を調べるのにあたるわけですが、それでも、まだ文科省もおっかなびっくりです。本当ならB問題に特化した形でどんどんものを書かせていけばいいのに、なかなかそこまでは決意ができないようです。

## 4. 読む力は言葉の力

とにかく、読解力とは言葉の力です。言葉を使いこなす力なのです。今回、新しい指導要領の中に、文科省が初めて、言語活動の充実をすべての教科でやってくださいと書きました。これがまさに2007年に国会で成立しました文字・活字文化振興法と関連してくる指導要領の変革なのですね。

ただ、「言語活動の充実をしてくれ」と指導要領に書いたとしても、現場は困ります。言語活動という聞きなれない言葉に、先生方は困りはてている。

もうあと一押し。「読書によってそれは可能になる」と書けば満点だったのですが、まだそこまで書き切る勇気は文科省にはなかったのではないかと私は残念に思っております。

とにかく幼いころから本を読む習慣があれば、言葉の力に関しては、おそらく相当なことは解決すると思うのです。先ほど小澤先生のお話しにもありましたが、とにかく読書ということがもっともっと、この社会の中で基盤的な、大切なものとして認められなければ、いつまでたっても教育は空回りすると思います。どんなことを教えても、どんなことを暗記させても、それを自分の知恵として、自分の頭で考えて、批判力と判断力を持つ。そういう子どもたちを育てていくことが求められています。そのための一番簡単な方法が読書であるということも、もっともっと認識すべきです。そこまで言い切る勇気がない文科省が今、私には歯がゆいわけです。

読書教育は大切です。読書を教育にするのかという意見もあるようですが、そんなこと言ってもらえない状況です。もうこうなったら読書科をつくって、小学校、中学校、高校、大学まででもいいです。徹底的に読書を教育として叩き込むことだと思います。そうしたら、言葉の力はつく。言葉の力がつけば、書くことは意外と簡単にできるわけです。今、英語の教育を早くやろうという動きもありますが、やはり国際社会に通じる基礎学力というのは、先ず母国語を読んで、書いて、話して、聞くと。その言語力が、一番大事だと思っています。

そこで、教師のミッションは何かと言いますと、生徒に書物と出会う機会をつくってあげて、自主的に学び続ける基礎学力をつけてあげることです。

## 15. 実態調査からみえてきた読書経験の効用

我々は国立青少年教育振興機構と共に、2年間かけて読書調査をしました。読書はいい、いいと言い続けているのですが、では、どういいのだと言っても、数値ではなかなか出せなかったのです。ですから、一回調査をしてみようということになりました。子どもころの読書活動が成長してからの意識・能力に及ぼす影響や、その効果が本当にあるのかどうかを調べました。対象は、大人と中高生です。20代から60代までの5,000人ぐらい。それから、中学校、高校は各1万人。かなり大規模な調査でした。

そこで印象的な項目が幾つかあるのですが、やはりはっきり言えたことは、子どもころの読書は、その後の人生に大きな影響を与えるということです。それから、小さいときに読書体験した人とそうでない人は、1カ月に読む本の冊数、読書時間がはっきりと違ってきております。

調査結果を私なりに分析しましたら、こういうことになるかと思うのですね。まず、3つに集約してみたいと思います。1つは、子どもころの豊かな読書体験が、その人の生涯の読書習慣をつけていくものであるということ。2番目ですが、記憶に残る本とか、忘れられない本を持っている人たちは、やはり生きる活力の土壌をしっかりと持ってきているということですね。3番目には、子ども時代



に豊かな読書体験を持っていると、やはり積極的な意欲をもって人生を開いていっているということが分かってきました。

とても意外だったのは、私は読書していない人とした人が、大人になって年収で200万円、300万円位違っているのかもしれない、と思っていたのですが、全然違わないのです。まったく関係なかったです。

今年中に全国で4回、この結果を皆さんにお知らせして、読書の有意性みたいなものをお伝えしていきたいと思っています。東京、大阪、そして長野、福岡の全国4カ所です。皆さんもチャンスがあれば、ぜひ、のぞいてみて下さい。

## 16. 小・中・高・大の橋渡しが問題

先ほどもデータが出ていましたけれども、確かに大学生は読んでいませんね。私たちの調査ではわりにはいい結果が出たのです。7割ぐらいの人が、本は好きだと言っているのですが、これはネットで調査したものですから、本当なら大学生は5割ぐらいは1冊も読んでいないというのが、正直なところだと思います。

小学生が今、1カ月に1冊も読まないと答えている子が4.5%あります。そして、中学生が16.4%、高校生が53.2%。これが1990年、ちょうど20年ぐらい前には、小学生は15%、中学生が45%、高校生は70%が1冊も読まないと答えたのですね。だから、相当改善はしています。これは読書推進に取り組み始めた皆さんがとても頑張ってくださったし、学校現場も頑張った結果です。頑張ってはおりますけれども、中高生になってくるとだんだん減ってくる。特に高校生が、絶望的といいたいくらい読んでない。それが、大学生が本を読まないということとリンクしていると思います。

ですから、この中・高・大をどのようにしてつなげていくかですよね。せっかく小学生のときに読む習慣がついたにも関わらず、どうもだめなのですね。続かないのです。そして、大学でガタンときて、そのまま社会人になってしまうから、先ほどのような企業家たちの不満が聞こえてくるわけです。

この間、出版取り次ぎ会社の社長さんに話を聞いたのですが、今年の入社試験のときに、「きみは読書が好きですか」という質問をし、「好きです」と答えたので、「どういうものが好きですかと聞くと、とうとうとしゃべってくれたので、あの子は率先して採りました」とおっしゃっていました。

このようにして、読書に関して入社試験でも相当な力を入れてくれると、学生たちの意識もまた変わらぬと思うのです。学生時代にたくさん本を読んでおけば、入社試験に有効になるということが、彼ら自身に分かってくれば、必ず本を読むと私は思います。

## 17. 教師に求められる本に誘う力

それから、私はもう1つ気がついたことがあります。学校の先生にどうも本に誘う力がないということです。これは、小学校の子どもたちが答えているのですが、先生に本をよく勧められると答えているのは15%。中学生になると7%で、高校生になると6%。このぐらい先生は本を勧めてくれないのです。あまり勧めてくれなかったと答えているのは、中学生の半分ぐらいあるのです。中高になったら7割が、先生方に全然勧められていない。ということは、先生方が読書ということにほとんど関心を示していないということになります。ですから、これはやはりよほど気がついた人たちが、この国で読書の有用性を言っていないと、教育の中の一番の基盤となる読書、本を読むということの重要性が伝わっていないと思います。教育が上滑りします。ものが書けない、ものが言えない。そういう学生を社会に輩出することになる。私はやはり先生方に、しっかりとそ



うところを見ていただきたいと思っております。

さっきビブリオバトルの話をしましたけれども、あれは結構面白いのであります。読みたい本を1人ずつ持ってくるのですね。そして、自分がこの本をどんなにいいと思っているかを5分ぐらいでしゃべるのですね。その後、みんなで投票して、最高得点になったものをチャンプ本としてみんなに紹介するわけです。読書に誘う1つの方法だと思っております。

## 18. これからの課題

最後になりますが、今、私が抱えているテーマが幾つかあります。まず、先ほど申し上げましたけれども、読書教育をどのようにすすめていくかということですね。読書をこの国の教育のなかにどう位置づけるかということ。これはとても難しい問題です。どこの国でも頑張っておりますが、韓国も中国もみな熱心ですが、これという特効薬がないようです。

それから、幼児期の絵本の読み語りや、人生にとってものすごい力になるということ。そのためには、絵本専門士、絵本へと子どもたちを誘ってくれる専門的な人を養成するということです。あと、学校図書館法の改正ですね。小・中・高の学校図書館に人がいないのです。いても、司書教諭の先生は授業を持ってい



て、専任の司書がないのです。子どもたちは、人のいない学校図書館に行かない。ですから、学校司書を配置するという法律改正を、必ず来年1月の国会で成立をさせていただきたいと、今準備をしております。

それから、公共図書館です。公共図書館がとんでもないことになっております。もちろんTSUTAYA図書館でいいと言う人もいるかもしれない。しかし、公共図書館について、あまり皆さん議論をしていなかったのではないかと思うのですね。ですから、地方自治体が、これが安上がりである、これで来客数が多くなるということになればそれでいいと、どうもあの佐賀県の武雄市長みたいなことになってしまう。私は、皆さんの前であれが悪いと言うつもりは決してありませんけれども、どうやら少し違うなと思うのですね。ですから、公共図書館のあり方をこれから国民的な議論として巻き起こしていきたいと思います。

また、今、電子出版がどんどん普及しておりますが、これに法律がついていないのです。ですから、著作権の改正も今年中に何とかしたいと思います。

最後になりますが、読書は教育の基盤であるということを申し上げました。そして、言語力がこの国で一番大切な基礎基盤だということを、疑う余地はありません。言語活動、言語力というのは、読み、書き、話す、聞く。これの総合力です。そして、一番基本になるのが読むということです。この一番基本になる読むということ、どうやって小さいころから教え、さらに大学を出て社会人になっ





たあと、生涯を通じて持続させることができるかということです。その為に、教育はどうあらねばならないかということ、我々は今一度考えてみたいと思います。なによりも、読むことの有意性というものを、もっともっと自信を持って言いつのりたいと思います。決して読書は趣味ではないと思います。

ちょっと時間が過ぎましたけれども、終わりいたします。ありがとうございます。(拍手)

○司会 肥田先生、ありがとうございました。

## 第 2 部

---

# 古きを読んで新しきを考える

—『基礎文献講読』における取り組み紹介—



立教大学 法学部 助教

安藤 裕介 氏

○司会 続きまして、第2部といたしまして、立教大学の実際の授業で読書に関わる、また、読書を核とするような授業を実践していらっしゃいます2人の先生にお話ししていただけます。

1番目に、法学部の安藤裕介先生をお願いいたします。安藤先生は法学部の「基礎文献講読」という授業を担当されています。よろしくお願いします。

## はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、法学部で助教をしております安藤裕介と申します。今日は大変貴重な場を与えていただき、ありがとうございます。

普段、授業をやっていると、なかなか毎日毎日が大変で、また夏休みや春休みに入ってしまうと、今度は原稿や自分の研究に追われて、自分がどういう授業をやっているか、それから、それをどう改善していったらいいのかということを集中心して考え込む時間がなかなかありません。今回は、そういう意味で非常にいい機会をいただきまして、自分の中でいろいろ整理ができた部分もあったかと思っております。そのことについて、今日はお話をさせていただきます。

タイトルは「古きを読んで新しきを考える」としました。このタイトルについてはまた後ほど説明をしたいのですが、本を読むということを通じた教育活動について、「基礎文献講読」という法学部で行っております少人数授業に引っかけでお話をさせていただきたいと思います。

## 1. 法学部「基礎文献講読」の紹介

まず、法学部の基礎文献講読という科目について、一般的なことをお話しします【スライド②-2】。実は本当につい先ほどなのですが、皆さんから「この科目はいつからやっているのか」という質問が飛んでくるのではないかと考えて調べたところ、1963年から立教大学法学部で開始されたようです。今年が2013年ですので、なんとちょうど50周年に当たるということを発見して感動していたのですが、そういった科目が法学部には設置してございます。

現在は、1年生向けの自動登録科目になっているのですが、従来は学生が自主的に応募して登録をするという位置づけでした。ただ、ここ数年は入学したでの1年生がもれなく全員履修する仕組みをとっております。特に法学部で学ぶ上での基本的な姿勢というものを修得してもらう場になっています。

その中身ですが、社会科学入門という位置づけでやっております。もちろん法学部ですので、法学や政治学に関わることの基礎的な知識を習得するということが前提として含まれています。ただ、この基礎文献講読において1つ重要なことは、過度に専門的なものにならないように配慮をしているということです。といいますのも、1年生の後期や2年生以降には本格的なゼミがあります。それに向けて、ホップ・ステップ・ジャンプでいえば、ホップの部分になるような準備



段階が基礎文献講読で、そういう準備段階を1年生の早い時期に全員に持ってもらうという位置づけでおこなっております。

そして、3点目のところなのですが、特に「読む、書く、話す」の部分ですね。先ほどの肥田先生のお話にも多少重なるところがあるかと思いますが、これらの経験を、共有された経験という形で、1クラス20人ほどのクラスで総合的に鍛えるというようにしております。まず、「読む」ということに関しては、テキストの読解と、そこから発展した資料探しを図書館の方と協力してやっております。また、「書く」ということに関しては、これは普段からコメントカードを書いてもらったり、最終的に、あるいは中間の段階で、レポートの添削指導をしたりしております。それから、「話す」ということに関しては、レジュメのつくり方やプレゼンテーションのやり方、あるいは作法というものを指導していくというふうになっています。特にこの読む、書く、話すというのが、20人のクラスで、単に先生と学生との双方向だけではなくて、20人そこにいる学生の間で、お互いに見る／見られる、そして聞く／聞かれるという関係を通じて、徐々に徐々にステップアップしていくところが基礎文献講読の醍醐味なのではないかと思えます。

この読む、書く、話すを鍛えるために、最近では法学部で『ラーニングガイド』という学部オリジナルのサブテキストを開発しております、ここ3年ほど使っています。こちらは、今日は皆さんにお配りすることはできないのですが、その代わりに追加の資料で『ラーニングガイド』の目次をお配りしているかと思えますので、ご関心のある方はまた適宜参照していただければと思います<次頁参照>。今日のシンポジウムの趣旨としては、こちらのほうに詳しく立ち入ることはできませんので、こちらは割愛させていただきます。

## 2. ものの見方・考え方を培うために読む —2冊のテキストによる授業実践—

それでは、基礎文献講読における読みの位置づけという今回の題目のほうに入っていきたいと思えます。法学部の先生方の中で一致している点としては、情報や知識を得ることよりも、むしろもの見方や考え方を研鑽していくことにウエイトを置いていこうではないかという方向性で、読むことを位置づけておりま

## 《法学部『ラーニングガイド』より》

I	大学で学べること、大学時代に学ぶべきこと	1
1)	大学で何を学ぶのか	1
2)	大学でどのように学ぶのか	2
3)	大学時代に学ぶべきこと	2
II	文献・資料の探し方	4
1)	紙媒体と電子媒体	4
2)	図書・論文・雑誌をどう検索するか	4
3)	法令・判決・評釈をどう検索するか	8
4)	インターネットの利用に関する注意	10
III	レファレンス・ガイド	13
1)	教科書・参考図書	13
2)	ウェブサイト	17
3)	映像資料	17
4)	試験について	18
IV	レジュメのつくり方	19
1)	レジュメはなぜ必要か	19
2)	レジュメのまとめ方	19
3)	発表の準備とレジュメの作成	21
V	発表とプレゼンテーション	26
1)	話し方	26
2)	話し方の順序	27
3)	発表用の文章をどう作るか	27
4)	発表用の文章の組み立て方	28
5)	発表用の文章作成の注意点	28
6)	実際におこなう際の注意点	28
VI	レポートのまとめ方	30
1)	レポートとは何か	30
2)	レポートの書き方	30
3)	引用とは何か	36
4)	テーマの決定	38
VII	議論しよう ―ディベートの活用―	41
1)	議論してみよう	41
2)	ディベートとは	41
3)	ディベートの進め方	42
4)	ディベートの準備の仕方	46

す【スライド②-3】。

実は、この点が最初にありましたタイトルの「古きを読んで新しきを考える」というところにもつながっています。別に「古きを読んで新しきを知る」でもいいのかもしれませんが、ここでは単に知る、情報を得るというだけではなくて、一度自分の頭で考えてみるという視点を強調しています。つまり、ある情報が与えられたときに、その情報を自分でどうかみ砕いて、それをどのように自分の中に入れていくのかという部分を鍛えるための行為として、読みを位置づけています。

もう少し言葉を換えて言いますと、読むという行為には、単に情報や知識を得る以上の何か積極的な活動が、情報や知識が自分の中に入ってくるというインプット以上の何かもっと積極的な活動が含まれているのではないかと。私はここに大事なものが、ものの見方や考え方を鍛えようというスタイルで読みを指導する1つの重要なポイントがあるのではないかと思います。

こういった観点から、私の授業では2冊のテキストを選んで使用しています。その1つは、なだいなだという作家の『権威と権力』という本でして、これは40年ほど前に出た本です。私は、なだいなださんのこの本を3年ぐらいつとテキストとして使っているのですが、先日惜しくも亡くなられて非常に残念でした。本当に優れたテキストでして、詳しいことはまた後でふれます。



それから、2点目が中江兆民の手による明治期の文献になります。さらに1世紀以上古くなるのですが、『三酔人経綸問答』という非常に古いテキストを使っております。これはあくまでも私の担当クラスでの使用テキストになりまして、法学部全体でこの2つのテキストを使っているわけではないということだけ、ご承知おきください。具体的なテキストというのは、法学部では個々の教員に任されていますので、私のクラスではこの2点だということです。

### 13. なだいなだ『権威と権力』

それでは、個別のテキストについてふれたいと思います。まず、なだいなださんの『権威と権力』ですが、幾つか内容と特徴をピックアップしていきます【スライド②-4】。まず大きな特徴は、高校生A君と先生の対話として展開されているということです。そのため、非常に語り口が平易で読みやすい、とっつきやすいということが学生には結構うけているようです。それから、もう1つの特徴は、身近な話題から始まって、徐々に徐々に、社会全体に関わる話題へとシフトしていくという巧みな話題展開があります。その辺も学生には非常にうけているところがあります。

具体的には、高校生のA君が先生のところに相談に来て、自分はクラス委員になったのだけれども、なかなかクラスがまとまらないのだと。先生、どうしたらうまくまとまりますかという相談から始まって、みんなが付き従う強いリーダーが必要なのではないかと。だけれども、強いリーダーと言っても、それがいいリーダーなのか、悪いリーダーなのかは、実のところ分からないよねという話になって、それでいろいろ権威について、あるいは権力についての話が展開していくわけですね。

やがては先生が、この人物はなだいなだ自身なのだと思いますが、先生が精神科医をやっているということで、医者と患者の話が出てきたり、あるいは、専門家と素人の話が出てきたりします。また、そういった人格を持った存在の権威だけではなくて、人間はどうして多数派になびいてしまうのだろうかとか、繰り返されるメッセージ、広告だとかテレビの情報というのが、どうしてある方向に人間を導いてしまうのだろうかとか。そういう権威の話、分散した、特定できない権威の話にもなって、学生たちからは非常に面白がられるテキストです。



最終的には、これは基礎文献講読の中の1つのメッセージともリンクしているのですが、自分で考えて判断することの大切さと難しさというものを、このテキストを読みながら考えてもらうということになっています。

## 4. 中江兆民『三酔人経綸問答』

2冊目のテキストであります中江兆民の『三酔人経綸問答』というテキストですが、こちらの内容は、お酒に酔った3人の論客による鼎談という展開になっています【スライド②-5】。この3人の論客は、それぞれ思想的な立場がパロディー化された寓意的な人物像になっていまして、1人が非武装中立、人間の善性、善き性を信じている「紳士君」という人物。もう1人が、力こそ正義だという考えで、争い事は人間の間からはどうしてもなくなると考えている「豪傑君」という論客。それから、中立的な立場として、この2人を最終的にいさめる「南海先生」という人物が出てきます。この南海先生のところに先の2人が教えを請いに行くという展開で話が始まります。

このテキストの文脈ですが、19世紀の末、つまり欧米列強がアジア圏に本格的な進出をしてきて、その脅威というものに日本がどのように対応していったらいいかということが考えられた、そういった時期のテキストとして、日本の近代



国家建設と国際社会への参入が議論されています。

先ほど申し上げた通り、紳士君と豪傑君というのが対立的な立場にあって、この2人の意見が最終的に南海先生という人に中和されるといふか、調停されるような話に、一見するとなっています。ただ、ここで気をつけないといけぬのは、中江兆民自身が、実はこの3人それぞれに自分の思想的な分身を宿している部分があって、単に極端な意見の2人が出てきて、片方は極端な平和主義者、片方は極端な戦争論者で、両者を中立的な立場でなだめて万事解決、めでたし、めでたしという話ではないということです。その証拠に、紳士君も豪傑君も最後まで南海先生の言うことに納得できず、最後は帰って行ってしまいます。

つまり南海先生という3人目の存在が、葛藤をなかなか収束できない。このことがどういう意味を持っているかといいますと、中江兆民自身が非常に悩んで、思考というものをどう鍛えていったかという経路が、実はそのままテキストに、そのままという言い過ぎかもしれませんが、ほぼ再現された形でテキストになっているのではないかと。言い換えると、自分の中に幾つか複数の視点を持って、その複数の視点をつき合わせて、戦わせて、その中で行われる作業が、考える、思考するということだと。つまり、兆民がこの『三酔人経綸問答』で行っていることというのは、単に天下国家を論じるときの何かお作法というようなものや、その際にどういう思想が典型的にあり得るかというような図式的な話ではない。実は、思考するということがどういうことかを、ある種擬人化した紳士君、豪傑君、南海先生のやりとりの中で見せてくれているのではないかとというのが私の考えで、それを学生にも気づいてほしいと思って、このテキストを使っています。

## 15. 学生に求めること

### 1) 問いながら読む

すみません、テキストの紹介が長くなってしまいました。では、実際どのように学生たちに読ませているかということですが、2点ほど注意していることがあります【スライド②-6】。まず1つは、読むことと問うことはセットであると。ここを意識して臨みなさいということは、口を酸っぱくして言っているところで。この問うという点なのですが、特に著者がどういう意図でそれを書いているのか。また、その主張の論拠や妥当性を皆さんは本当に納得できますかと。その

辺のことを全部うのみにするのではなくて、問いながら読みなさいと普段伝えて  
いるわけです。

これは、別の視点から言えば、読むという行為は、実は単に字面を追って、情  
報としてそれを吸収するだけの作業ではないのだと。これは、先ほどあいまいに  
ふれましたが、実は単に情報や知識を手に入れるということ以上の何かが、読む  
という行為の中には介在しているのだということです。普段読書に慣れている人  
というのは、これをわりとオートマティックに、無意識的にやっていると思うの  
ですが、実際はそれがほとんどできない学生が多いので、コメントカードという  
ものを毎回作成してもらって、さらにそれを全員に配って、ほかの人がどうい  
うことを考えて読んだかとか、自分がどういふうに読んだかをまわりの人にも伝  
えてもらうという授業スタイルで進めています。特にこれはメモをとって、手を  
動かして読むということにもつながりますので、漫然と読むことがなくなります。  
こういったことを訓練することの重要性を感じています。

## 2) お化けと格闘するな ―理解にもとづく批判を―

もう1点が、批判的な読みとその注意点ということになります。先ほど問うこ  
とと読むことがセットだと言いましたし、学生にも全部うのみにするな、疑問点  
や疑うという姿勢を大事にしろと言っているのですが、何でも批判すればいいと  
いうわけではないのだという、2点目の注意点が出てくるわけです。つまりこれ  
はどういうことかと言いますと、よき批判者になるためには、よき理解者になら  
なければならないと。ほかの言い方だと、私は、「お化けと格闘するな」と言っ  
ています。お化けというのは、つまり、著者が言ってもいないことを勝手に言っ  
ていることにして、それと戦っても全然意味がないわけですね。実態をとらず  
に、勝手に自分でこしらえた敵と戦うことになるので、そんなことは全然意味が  
ありません。もしよき批判者になりたければ、まずよき理解者でありなさいと。  
真剣に、真摯に相手を理解するところから批判は始まると言っています。

## 16. 学生たちの反応

### 1) 現代に通じることへの驚き

以上が読み方のことなのですが、それでは学生たちの反応はどうかと、テキストや授業に対する反応ですね【スライド②-7】。1つ好感触な反応としては、やはりなだいなだにしても中江兆民にしても、40年前、あるいは1世紀前に書かれたことが現在にも通じることへの驚きというのが、彼らから非常に出てきます。これは具体的にどういうことかと言いますと、特になだいなださんの『権威と権力』のほうに引きつけていいますと、例えば、権威というものと自分の判断が、あるいは権威に従うということと自分の判断がどう関係してくるかということに関して、学生のほうから、原発事故をめぐる政府と専門家と国民の関係はどうだったのだろうかという具体的な話題が出てきたりします。あるいは、これだけ情報社会になっていて、簡単に知識にアクセスできるのだから、権威は失墜していると最初皆さん考えるのですが、だんだん分散された権威の話になると、ソーシャルネットワーク、SNSというサービスも、実は新しい権威というのをあちこちに生み出しているのではないかといった考えも出るようになります。この『権威と権力』に関しては、40年前という、ネットなどというものが全然身近な存在ではなかった、存在もしていなかった時代のことが書かれていながら、それが今どうまく結びついて議論が進むというような展開も見られて、その辺はわりと成功した部分かなと思います。

### 2) 新しい本を読みたい

これに対して、他方、やはりもっと新しいものを読みたいという反応もあります。どうしておまへは、最終的には今のことを考えさせるのに、迂回してわざわざ40年前や1世紀前のことを読ませるのだと。それはそのとおりなのですが、そういう反応があります。つまり、学生たちからすると、我々は今を生きているのだから、新しいものをそのままに議論してもいいではないか。どうしてそういうストレートな道をとらずに、おまへは迂回するのだということと言われるのですが、その辺は私のほうでいろいろ考えもありまして、ここはまた後で補足をします。そういった反応があるということです。

### 3) サプリメント化された知を求めている

それからもう1つは、やはりこの辺は重要な点だと思いますが、知のサプリメント化を求める傾向もあるのではないのでしょうか。特にこれは中江兆民を読ませたときに出てくる反応なのですが、学生たちからは、「兆民はもっと簡単に言えることをわざと難しく言っているのだ」とか、「非常にまわりくどく言って煙に巻こうとしている」と反応するわけですね。つまりこれはどういうことかということ、彼らからすると、どうも分かりやすいものがないものなのだという認識があるらしくて、特に自分たちが読んでいるテキストにどういった栄養素が含まれていて、それをどういうふうに吸収したら、どういう効果が頭にあるのかということに非常に知りたがりです。そういう意味で、自分で咀嚼をしてみ砕くというよりは、むしろサプリメント化されたものを飲み下すように、情報や知識を求める傾向があるのかなと思います。

## 7. 良い本は消費も消化も容易にされないもの

最後になりますが、そういった学生たちのいろいろな反応もありつつ、私が考えて、そして信じていることは、本当に良質な本というものは、簡単に消費あるいは消化されないのではないかということです【スライド②-8】。消費されない



というのは、時代が変わっても色褪せないということ。単に時事的な問題を扱ったもの、あるいは瞬間風速で盛り上がりを見せて、マーケットにわーっと広がっているものは、本当に何年か経て検証に耐え得るか、あるいは議論されているのか、ちょっと怪しい。それに対して、やはり本当に良質な本というのは、簡単に消費されてしまわないのではないかというのが、私の1つの考えです。

それからもう1点、消化されないというのは、知のサプリメント化にも関係していますが、やはり本当にいい本というのは、読み返すたびに自分の成長に応じて新しい発見と新しい味わいというものが出てくる。私も10年以上前になだいなだも中江兆民も読んで、そのとき気づかなかったことに最近かなり気づかされました。この点では、やはりそうなのだなと実感しているところがあります。この辺のことを学生に伝えたいなと思っているのですが、なかなか伝わっていないところもあり、もちろん私の反省すべき点もたくさんあるのですが……さらに詳しい話は、また後ほど質疑応答でさせていただきたいと思います。

ご静聴どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 安藤先生、どうもありがとうございました。質問、コメント、ご意見は後で質疑応答、ディスカッションの時間にまとめてお願いしたいと思います。



【スライド②-1】

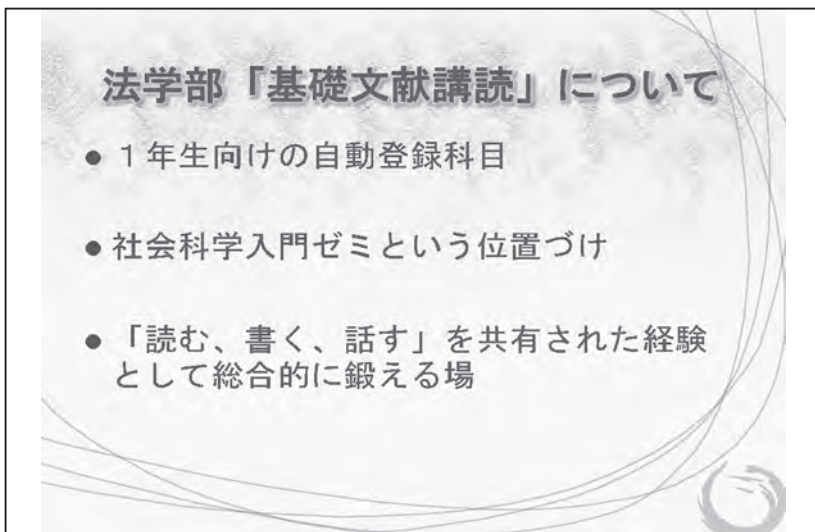


古きを読んで新しきを考える  
「基礎文献講読」における取り組み紹介

立教大学法学部 安藤裕介

The slide features a light gray background with a faint, abstract pattern of overlapping lines and a circular motif on the right side. The text is centered and presented in a clean, sans-serif font.

【スライド②-2】



法学部「基礎文献講読」について

- 1年生向けの自動登録科目
- 社会科学入門ゼミという位置づけ
- 「読む、書く、話す」を共有された経験として総合的に鍛える場

The slide features a light gray background with a faint, abstract pattern of overlapping lines and a circular motif on the right side. The text is centered and presented in a clean, sans-serif font.

【スライド②-3】

当該科目における「読み」の位置づけ

- ものの見方・考え方 > 情報・知識  
↓  
2冊のテキスト

- 1) なだいなだ『権威と権力』（岩波新書、1974年）
- 2) 中江兆民『三酔人経綸問答』（桑原武夫・島田虔次訳、岩波文庫、1965[1887]年）

【スライド②-4】

なだいなだ『権威と権力』

- 高校生A君と先生の対話
- 身近な話題から社会全体に関わる話題へ
- 自分で考え判断することの大切さと難しさ



【スライド②-5】

## 中江兆民『三酔人経綸問答』

- お酒に酔った三人の論客による鼎談  
（紳士君、豪傑君、南海先生）
- 19世紀末における日本の近代国家建設と  
国際社会への参入
- 兆民自身の思考の経路をたどる

【スライド②-6】

## どのように読むのか？

- 「読むこと」と「問うこと」はセット  
→ コメントカードの作成と共有  
（手を動かして読む）
- 批判的な読みとその注意点  
→ 「よき批判者」になるには「よき  
理解者」であれ

【スライド②-7】

## 学生たちの反応

- 40年前／1世紀以上前に議論されていたことが現在にも通じる、という驚き
- もっと新しいものを読みたい、という声
- 知のサプリメント化を求める傾向

【スライド②-8】

## むすび

- 本当に良質な本は簡単に消費（消化）されない
  - 時代が変わっても色褪せない
  - 自分の成長に応じて新しい発見と新しい味わいがある



[事例報告]

## テキストの森への誘い —全カリ領域別B科目を担当して—

立教大学 経済学部 教授  
中島 俊克 氏

○司会 続きまして、事例報告の2番目になります。経済学部の中島俊克先生にお願いいたします。中島先生はご専門は経済史ですけれども、立教大学の全学共通カリキュラムで、読書を核とした授業をやっております。その話をお願いいたします。

それでは、中島先生、お願いいたします。

### はじめに

○中島 中島でございます。法学部の先生の非常にまじめな話の後に、若干ずつこけた話をする事になると思います。最初にお詫びがございまして、副題が「領域別B科目を担当して」とありますけれども、これは正確に申しますと、「領域別B科目の編成を担当して」という話が主になるはずであります。と申しますのは、私もこの科目を担当はいたしましたけれども、こけたと申しますか、滑ったと申しますか、あまりうまくいかなかったのですね。その話をする、安藤先生の成功した話の後で、格好が悪いので、少し中身を変えまして、編成する側の苦労話を半分ぐらいしようかと思っております。

### 1. 全カリ（全学共通カリキュラム）の変遷と構成

全カリ総合領域別Bというのは、立教の中でしか通用しない言葉でありますので、まずその解説からしなければなりません。全カリというのは、昔で言う教養部みたいなものです。大ざっぱに言うとそうなのですが、立教大学は1997年

---

まで一般教育部というのがあって、ほかの大学と同様に、1年と2年は一般教養で、3年と4年が専門という積み重ね型のカリキュラムでした。

そういう教育はまかり成らぬというご時世になったし、いわゆるお子さまランチ的な教養科目は学生も飽き飽きしているというのもありまして、一般教育部を廃止して、語学以外の導入教育は、原則として全部、各学部が担当することにいたしました。それだけだと専門バカになってしまうので、専門科目を補完するものとして、全カリの中に総合教育科目というのをつくりました。それで一般教養科目の一部を引き継ぐという仕組みにしたのでございます。ですから、全カリというものは言語と総合に分かれていて、私は現在、総合のほうの責任者です。

一般教育部時代と違いますのは、一般教育は1年と2年のための科目だったのですが、全カリ総合というのは恐るべきことに、立教大学には今、2万人近い学生がいますけれども、全学部全学年が自由にとってよろしいという、編成側にとってはとんでもない話になっているわけです。そうすると、当然、人気、不人気が出てきて、かつては800人、1,000人なんていうクラスはゴロゴロありました。そこで昨年度、カリキュラムを改正したのを機会に抽選登録制というものを始めました。上限300人、学生は2回抽選登録をして、それでまだ満杯にならない科目については普通の科目コード登録というものをやってよろしいという仕掛けにしたのでございます。

このように全学部、全学年にとってよろしいということになると、魅力的な科目を並べなくてはいけない。そうすると、総花的と申しますか、学生のほうにすり寄りすぎて、こう言うては悪いですが、講談社現代新書みたいなものがずらりと並ぶということになってしまいましたので、もう少し噛みごたえがあるといいですか、がっつり勉強してもらうような科目が必要だろうということで、昨年度のカリキュラム改正のときに編成し直しました。

現在、全カリの総合は「立教科目群」、「領域別科目群」、「主題別科目群」、「スポーツ実習科目群」という4つのカテゴリに分かれています。旧来の教養科目めいたものは、この主題別科目群というところに押し込んでしまいました。立教科目群というのはたとえば「立教大学の歴史」などが含まれます。先ほど小澤先生がふれられました「立教ゼミナール」というものもここに入っています。それから、本日話題にする領域別科目群というものをつくりました。それと、スポーツ実習科目群もあります。この4つのカテゴリについて縛りを設けまして、立教科

目群と領域別科目群から6単位3学期コマ、主題別科目群とスポーツ実習科目群から14単位7学期コマ。学生は128単位ぐらいを取って卒業するので、そのうちの最低20単位は、この全カリ総合から取ってもらうという仕組みになっております。

## 2. 全カリ総合「領域別B科目」の特徴

この領域別科目群というのは、簡単に言うと、各学部の入門科目を全カリに持ってきたものとして構想されています。特徴は、学生は自分の学部が提供する領域別科目は履修できない。経済学部の学生は、経済学部が提供する「経済学入門」の講義は取れない。教師の側から言うと、専門外の学生だけを教えるという仕組みであるのが特徴であります。

完全な講義系で人数制限のない「領域別A」のほかに、「領域別B」というものをつくったのは、そういう入門系のやさしい科目だけだと、内容がスカスカになってしまうので、もう少ししっかり文献を読ませて密度の濃い教育を行わなければならないと考えたからであります。講義要項の中身をみると、それぞれの領域の古典や重要文献を直接読んで、それについて専門家と1対1で話すことで、専門外の履修者が大人数の授業や独学では得られない、その分野の深い理解に到



達することを目標としているとあります。ですから、1クラスの定員が40名。先ほどの「立教ゼミナール」は30名でしたけれども、領域別Bはゼミではなくて、理念としては講義系の科目になります。読む要素を加えた、入門講義の密度の濃いものということで構想しました。これが全カリ総合の領域別Bという科目の外枠でございます。

### 13. 履修と単位修得の状況

昨年度は、池袋キャンパス、新座キャンパス、前期、後期合わせてこの領域別Bを28半期コマ展開いたしました。そのうち1次抽選で満杯になったのは半分もありませんでした。ですから、これは明らかに学生には取っつきにくい科目と捉えられております。でも必ずしも履修意欲が低いわけではない。ただ、1時間目や5時間目に配置してあったり、あるいは、シラバスに難しそうなのが書いてあったりしたので敬遠されたということもあって、最終的に履修者数が10人以下というのが4科目ございました。逆にほぼ埋まったというのが15科目。初年度の科目展開としては成功かなというところです。

後期分だけの集計で、全体で491名の学生が履修しました。内訳ですが、科目の理念から言うと、学部で1年、2年だけでなく、自分の専門の訓練が終わった3年、4年にたくさん取ってほしいとつくる側は考えていたのだけれども、実際はやはりそうはなりません。1年生が45%で、2年生と合わせると、やはりもう4分の3近く下級生になってしまって、3、4年はほとんど取ってくれなかったという結果になってしまいました。最終的に単位を取れた履修者は、77.6%でありました。

### 4. 領域別B科目の課題

#### — 担当教員アンケートの結果から —

概要は以上のようなことですが、各クラスの運営は実際うまくいったのか。立教大学では授業評価アンケートというものをやっていますけれども、全カリでは、このアンケートは、大人数科目のほうを見るだけで精いっぱいですので、この領域別Bは、授業評価アンケートの対象外でした。

そこで、教員に対して個別にアンケートをとりました。出席はどうだったか。授業運営はうまくいったか。効果は上がったか。それから、新しい科目ですので、この領域別Bのカテゴリ自体についてどう思うかという質問項目を設けました。古典や重要文献をきちんと読ませることができたか、そういうことを有意義と思うか。教室の大きさや機器などについても感想を聞きました。28名中25名から回答を得まして、だいたい学生はみんな出てきて熱心に勉強したということでした。だけれども、始まったとたんに出席者が激減した科目が複数ございまして、実を申しますと、私がやったのもその1つです。

全体にどういうことが言えるかというと、先ほど申し上げたように、半分のところは40名埋まったのですけれども、履修者が少ない科目もあった。少なかった科目は、名目は講義科目なのだけれども、実際はゼミにしまって輪読をやった。それでだいたいうまくいっています。私のところは違いましたけれども、40名に対して、読ませる要素を少なくして、入門講義と割り切ってやったところもうまくいっています。

しかし、科目定義に忠実に、古典を本当に理解させてということをして正直にやった人は、だいたい苦勞しているという結果がアンケートからは明らかになりました。と申しますのは、やはり各学部の少人数の入門科目をそのまま持ってきてしまった人が多かったのですね。そうすると、お客さんも違いますし、受講の意欲



というか、関心も異なります。その辺で戸惑った。そもそも古典や重要文献を読ませるとするのは、ゼミ形式でないと無理ではないかという意見が複数聞かれました。

こういう形で、まだ教員の側に戸惑いが見られるので、この科目の趣旨、もっと簡単に言いますと、学部基礎科目みたいに難しいことをやってもらっては困るということをもっと徹底すれば、もう少しうまくいくようになるのではないかというのが、このアンケートをとった上での反省点です。そういう教訓を私自身が破っているということは、後でお話します。

それから、講義系科目だということで、固定いすの教室を割り当ててしまった。これが非常に評判が悪かったです。後で申しますように、実際たいていは学生同士が話をするという形式を導入します。可動機のほうがよかったとか、それも今後の反省材料です。以上が、全カリ領域別Bをやった、だいたいの結果であります。

## 5. 授業スタイルの事例紹介

### 1) 多読型か精読型か

授業の進め方ですが、学生に配布されたシラバス（『講義内容』）を見ただけでも、いろいろなパターンがあります。テキストを読ませるのですが、そのテキス





トというものについての解釈がさまざまで、ある日本史の先生は、文字通り古文書解読みたいなことをやってしまった。この先生と私のアダム・スミスが二大失敗事例だと思えます。

学部の少人数科目というと、例えば、英文科で「シェイクスピアをやります」というと、今日はオセロで、来週はリア王でという形でバンバン読ませる。それも1つのスタイルです。そういうパターンでやった先生も若干はいらして、たとえば「社会学を読む」のイ・ミンジン先生などは比較的そのパターンで、半期14回の間に5冊読ませる。これもやはりあまりうまくいかなかったみたいです。

だいたい精読型でした。多読型をやると、学部の入門科目などだと、毎週シェイクスピア1本ずつでも学生はついていくのですが、全カリだとなかなかそうはいかない。本当に読んでいるかどうかをどうやってチェックするのかとか、教員の準備の負担も大変だし、学生も毎週1冊ずつテキストを買うわけにもいかないしということで。それなら精読型がいいかというと、精読というのは、特に専門的な文献を選ぶと難解になります。受講者の粒がそろわないと、学生の反応を聞くといってもなかなか難しい面があります。「半年でたったこれだけしか読まないの」という不満が生じる恐れがあるわけですね。そういうことでどちらも問題をはらんでいるのですが、だいたいの先生は精読型でいきました。

## 2) 読む要素を加えた入門講義

さらに3つのパターンがありました。先ほど申しましたように、特に40人フルの科目ですけれども、ほとんど先生がしゃべってしまったというパターンです。読む要素も加えているのだけれども、これだと破たんは生じない。その中で比較的うまくいったと言いますか、これはうまくいって当たり前というところが多少あるのですけれども、仏文の平野隆文先生の、有名な「赤ずきんちゃん」というのがあります。「文学を読む」の「シャルル・ペロー『童話集』の謎をスリリングに読み解く」というものです。これは、実を申しますと、文学部の名物講義でありまして、その縮小版ですから、抽選登録で40人の定員に270名が来ました。でも、実際は途中でもって平野先生がダウンしてしまって、同じ仏文の細川哲士先生が代講するという形になりました。岩波文庫のペローの童話集、660円を学生に買わせて、来週までにここを読んできなさいと言っておく。ですから、中身はほとんど先生がしゃべってしまうわけでありまして。それが一世一代と申し

ますか、だいたい「赤ずきん」などをやるのですけれども、あの赤い帽子の性的なメタファーの話とか、いろいろ多面的に読み解くということを毎回、毎回やって、一見単純な話を深く読む喜びを味わうというものです。コメントペーパーを毎回書かせて、節目には小レポートも書いてもらう。途中から細川先生が引き継いでやったのですけれども、ただレポートやコメントペーパーを添削して返すだけではうまくいかなかった。そこで、途中から全員のコメントペーパーを張り出してお互いに批判させるということをやったら、がぜん学生にやる気が出て、そこからうまくいくようになったということがアンケートにございました。そんなふうに、こうした少人数科目というのは、シラバスに一応やり方を書くのですけれども、そのとおりにいかないことが多いなど、いろいろと問題はあります。

同じようなやり方でうまくいったケースというのは、経営の有馬賢治先生の「松下幸之助に学ぶ経営観」というもので、これは松下幸之助の『商売心得帳』という、昔からのベストセラーで、PHP 文庫で 500 円ですが、これを買わせて毎週 1 ページ読んでこさせて、これもやはりその知識をもとにして話をする。それで、コメントペーパーのやりとりというやり方は同じです。こういう芸当ができるのは、やはり平野先生とか有馬先生みたいに、本当にベテランで、舌一枚で学生を面白がらせることができる人に限られるのでして、私みたいな素人がまねをしようとんでもないことになります。



### 3) 輪読

私がやったのは輪読であります。25名しか来なかったのですが、新座で1時間目でやりました。考えましたのは、一応、アダム・スミスをやるのですけれども、彼には『国富論』の前に『道徳感情論』という本があります。新座の学生は、観光は違うでしょうけれども、コミュニティ福祉学部も現代心理学部も心理学をやりますから、これがうけるのではないかと思って企画しました。堂目卓生さんの『アダム・スミス』というのが中公新書で出まして、この本は日経賞をとったのですよね。それで、これを一応読み進めるとい形にしました。スミスの『道徳感情論』『国富論』が岩波文庫で出ていますが、それは別に買わせませんでした。堂目さんの本の中に原文の引用があります。その部分を原書からコピーして配るといやり方をとりました。そういう形でこの新書を読み進んで、スミスの原文を味わわせて、最後に違う人の、井上義朗さんという人の出たばかりの新書の1章がスミス論だったので、そいつも読ませて、堂目さんとは違う見方もあるのだよということを示す。それが私の話の中身だったわけです。

しかし、なぜ失敗したか。やはり詰め込みすぎたのですね。これは今反省してみますと、おそらく経済学部でやっても、みんなあまりついてこれなかっただろうと思います。25名のうち11名脱落しました。最後まで残ったのは14名ですね。最後の小テストを書かせてみたら、堂目さんの言っている中身は分かったし、オリジナルの味も多少味わったようなんだけど、課題として一部を訳させて、それでスミスの思考方法自体を追体験してもらおうといところはどうもいかなかったですね。辞書と格闘しただけで終わったようです。ましてやスミス解釈についていろいろな立場の違いがあるなどといところまで理解が及んだのは、おそらく2、3名にとどまったのではないかなと思います。これは失敗事例であります。

やはり輪読というのは、本をガチガチ読むわけですから、専門の、これからその学問を積み重ねていくのだという意欲ある学生でないとい無理ですよね。そういうことで、やはりこのパターンはとるべきではないだろうと思います。法学部の先生などでも、やはりこういう精読、輪読型のことをやった人もあるのだけれども、やはりだいたいそうはうまくいっていない。私ほどの失敗はまれかもしれませんが。

#### 4) グループ学習

一番うまくいった事例というのは、「経営学文献レビュー」の荒井将志先生がやった「グローバル・ビジネスとイノベーション」であります。これはグループ学習で、彼は賢いことに、池袋キャンパスでもほぼ唯一、受講生全員がノートパソコンを使える7201教室というところを押さえて、ドラッカーの『イノベーションと企業家精神』というものを読ませる。もうかなりのクラシックと言われている本ですが、これを読ませる。次回までにここを読んでこいと言う。最初の2回は経営学の講義をやるのです。あとは、学生をその場で5名ごとのグループに分ける。それで、学生自身が授業を進める。まず、読んできた点についてディスカッションをして、ポイントはこれとこれ。そいつを出させて、その優れたところ2カ所でもってディベートをさせて、最後に、各グループでその時間に学んだことをレジュメにまとめるというか、レポートを書かせる。それを翌週までに返す。翌週までにというのは、CHORUSというイントラネットがありますので、添削してそこに返して、それを次の材料にする。それだけだと、個別評価が不十分なので、学期末には、そのドラッカーの本についての書評を書かせる。ここまでやる。これにはコツがあるのですね。つまり、グループを6名以上にはいけない。6名以上にすると、必ずフリーライダーが出てくる。毎回入れ替えるのですね。その場合、学部学年を混ぜるのはもちろん、一番大事なことは男女を混ぜるとい



うことです。そうすると、見栄を張りたいので、家で一生懸命読んでくる。それがコツなのだと、彼は経済学部飲み会で教えてくれました。これをやると、今の学生でも相当難しいものを読んでくるというので、彼は、今年はもっと欲をかいて、野中郁次郎先生の『知識創造の経営』というかなり難しい本を使っている。これもクラシックですが、私も一度かじりついたことがあります、難しかった。こういうものまで読んでくるというのですね。やはりこれでいくべきなのかなと思います。

## 6. 話すために読む、書くために読むという サイクルの確立が大事

最後のまとめとしていえば、単に読ませるだけではなくて、話すために読む、書くために読むという、最初に小澤先生が言われたようなサイクルを確立することが大事です。その場合、学生と教員だけではなくて、学生相互のコミュニケーション。その間でいろいろ見栄を張り合ったり、そういうことをやる。先ほどの平野先生のケースもそうですけれども、安藤先生のものにもありましたけれども、お互いに何をやってきたのかを競争し合うような状況ができれば一番いいだろう。その場合には、やはり情報機器というのは積極的に使うべきであると考えます。ノートパソコンが全員にわたる教室はあまりないですが、今はスマホというものがある。携帯・スマホは、読書を推進する側の方は目の敵にしますが、あれもうまく使えば、自分が読んだ本の感想を掲示板に書いて、それをまわりに評価してもらうとか、そんなうまいサイクルをつくれるのだったら、そういうものも積極的に使っていきべきなのではないかというのが結論でございます。

以上、少し時間をオーバーしましたが、事例報告にさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

○司会 中島先生、ありがとうございました。この後、質疑応答、ディスカッションの時間をとりますけれども、ちょっと会場の設営をいたしますので、しばらくお待ちください。

○**司会** それでは、質疑応答、ディスカッションの時間に移らせていただきます。基本的にはフロアからのご質問、ご意見に適切な方に答えていただくという形にしようと思いますが、多少臨機応変に進めていきたいと思っております。フロアから、まずご質問がありましたらということで受けたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。差し支えなければ、所属とお名前をお願いいたします。

### 質問1

○**原田** 法学部の原田でございます。本日はお三方のご報告、大変興味深く拝聴いたしました。

私からは、肥田先生と安藤先生にお尋ねをさせていただきます。肥田先生につきましては、読書が大事であると。読書の効用についてお話を頂戴いたしました。しかし、大学生にとりましては、今、これだけインターネットが普及いたしますと、知識や情報というのは、別に本から得なくても構わない。そういった意味では、大学生にとりましては、知識や情報以外の何かを得る手段として、読書というものがあるのかなという気がいたします。例えば、何か調べ物をしなさいというときでも、パソコンでウィキペディアにアクセスして情報を得ることができる



と。そういったものはここで得られるので、読書をする必要がないと、ついつい学生は考えてしまいがちであります。そうした意味では、学生に対してコンテンツとして何を読ませるのかということについて、やはりきちんと伝えていく必要があるのかなど。そうした意味では、なぜ読むのか、学生にとっては、なぜ読まされるのか。こういったことについて、先生がどのようにお考えなのか。大学生の読書というのはどういう効用があるとお考えなのかをお尋ねしたいということです。

安藤先生についての質問も似ているのでありますが、私自身も読むことは問うことだと考えております。おそらくそれは話すことと通じるのではないかと思うのでありますが、先ほど申し上げた読書の効用というのが、知識や情報を得るといふ以外のものになりつつある。学生にとっては、それ以外のものを得る手段として仮に読書というものがあるとすれば、それを伝えていかないといけない。読むということは問うことにつながるのだよと。ところが、学生にとっては読むことと問うことの間非常に距離があって、しかも、その距離を埋める作業が教員に求められる。しかし、そうした能力を持っている教員はいいのですけれども、持っていない教員も結構いたりして、サイエンスというよりは、アートといいますが、本人の秘伝のタレみたいなのが非常に大きくなってくと。先生ご自



大学教育開発・支援センター 副センター長、副総長、法学部教授 原田 久

身として、実際に問うということに学生を誘うときのコツみたいなものをお聞かせいただければありがたいと思います。

以上でございます。

○**司会** まず、肥田先生でよろしいでしょうか。学生の立場としては、読書以外にもネットなどでいろいろな情報を得ますけれども、読書はその1つに過ぎないという位置づけがされているのではないのでしょうか。この点に関して、もしご意見があればということをお願いでしょうか。

○**肥田** 確かにおっしゃるとおりなのですよね。情報はもうネットでいくらでも取れるし。私は、読書が情報をとるためにだけあるとは考えません。人生の総合力を得るためと考えます。たとえば、これは少し年齢が低くなるのですが、音楽教育の場合、先生は何を勧めるかという話ですよね。ある場合は、吉田秀和の評論集とか、小林秀雄の音楽に関する評論を読ませるとか。それから物理の授業などでは、湯川秀樹とか寺田寅彦のものを読ませるとか。そのように教科書だけでなく関連する読み物を先生方が選んでくださるのがいいなと思っています。

先ほどの話にもあったように、各科目の専門的な本をガンガン読めと言っても、これは無理ですよね。たとえば、ネットの情報をとってそのまま彼らが理解できて、自分の文章にできるかということ、それができないわけです。情報の切り貼りになるのです。ですから、まずは関連書物をどれだけ先生方が紹介できるかというところにかかっているのではないかと思うのですが、どうなのでしょうね。

○**司会** これは指導する側の技量も問われるということになりますでしょうか。安藤先生、質問が重なると思うのですが、読むということと問うということに関しては距離があるのではないかと。それに関して、教員、あるいは指導する側のわざや技量が問われるのではないかとのご質問だったと理解していますが、いかがでしょうか。

○**安藤** ご質問ありがとうございます。やはり非常に難しいですね。原田先生もサイエンスというよりは、アートの世界ではないかとおっしゃっていました。まず、方向性としては、読むことと問うことの大切さ、問うこととつながった読書



が大事だという点は共有していただけたと思います。ただ、それをうまく学生に伝えていくというのは、本当に至難の業です。私も議論を温めるため、あるいは、学生に、実はこの古いものが現代的なことともつながっているんだよ、ということに気づいてもらうためにいろいろ投げかけるのですが、そのときに学生から言われて1度ショックを受けたのは、「先生は議論を誘導しているのではないか」ということでした。もちろん、学生に主体的に気づいてほしいのですが、けれども、限られた時間、1時間半、90分という授業の中で大事な点に気づいてもらうには、なかなか学生だけに任せるといってもいかになくて、やはりこちらから多少議論の種をまいたり、道しるべになるようなことを出さざるを得ません。読むことと問うことがつながっているとしつつ、問うてみて意味のあることは実は限られていて、そこに学生を連れていこうとすると、どうしても誘導になってしまう。そうすると、それは主体的な行為なのかというように、非常に堂々巡りの問いになってしまって難しい。そこは考え出すとなかなか自分でもどうしていいのかというところがあって、悩みながらやっているところです。すみません、どうも煮え切らないお返事になりますが。



○**司会** 原田先生、よろしいでしょうか。

○**原田** 安藤先生、肥田先生がおっしゃることには私も共感するのですが、学生は特に自分で問いを設定することに全く慣れていないし、そういう作業を高校時代までやってきていないので、たぶん安藤先生のようなことを言うと、そんなに質問が、問いがあるなら早く言ってくださいよ、そういうのは早く、誘導をせずに言ってくださいよ、待ちきれないよという感じがあるのかなと。ですから、主体的に問わせるということと、読むという行為と同時に問わせるということで、二重の苦しみなのかなという感想を今持ちました。以上です。

○**司会** ありがとうございます。ほかにフロアからいかがでしょうか。

## 質問2

○**学外からのご来場者** \*\*大学の\*\*と申します。遠くから来たかいたったなと思いました。

どなたにというわけではないのですが、2つほどコメントというか、質問をさせていただきます。自分でもまだまとめきれていないのですが、1つは先生方が



おっしゃられたことに、僕も賛同いたしました。

もう1つは、小さいときから読書が必要だというのはとてもよく分かるのですが、学校教育として、日本は情緒的な国語教育か、論理的な国語教育かを選ぶときに、情緒のほうを選んだという歴史があったと思います。それが果たしてよかったのかということが1つです。やはり学校が上がってくる、段階が上がれば上がるほど、論理的な文章を読むことになると思いますが、たぶん学校の先生も、児童、生徒も段階が上がっていることに気づいていないというか、気づくチャンスがないと思うのですね。読書の質が変わってきているということ。その辺の仕掛けというのがないかなと。今、大学で教えていますけれども、特に高校時代は、やはり図書館に行っても、受験勉強のためのスペースになっていたりしますよね。だから、何かいいアイデアがないかなという漠然としたご質問で、どなたにというわけではないのですが、アイデアがあればご教示いただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○**司会** 学校教育として、情緒に関わる国語教育と、論理的なものに関わる国語教育の2つがあるけれども、学年が進むにつれてどのような比重を置いたらいいのか。この辺でもしご意見がありましたら。肥田先生、いかがでしょうか。

○**肥田** まったくそのとおりです。たとえば、『ごんぎつね』を何十時間もかけて情緒的に教えていくやり方ですよね。ところが、PISA型でしたら、まずこれを批判して、そして自分の考えを述べてということですよ。その指導ができる先生方がまだ少ないのです。ですから、言語活動の充実と言いましても、ある程度、何か絵に描いた餅になって今滑り出しているのですが、そこで私は教師の育成がとても大事で、やはりころっと考え方を変えないと、これは全教科で言語活動の充実なんていうことは不可能に近いと思いますね。ですから、私はまず文科省が、教育の形が変わったというか、流れが変わったということを引きちんと言うべきだと思うのですね。まだはっきり言っていないように思いますよ。

○**司会** ありがとうございます。文科省などからも積極的な関わりがあっているのではないかとということでしょうか。ほかのお二方、もしご意見があれば。中島先生、いかがでしょうか。

○中島 正直申し上げて、大学受験のあり方が今のような状況だと、要するに、情報のインプット、アウトプットの能力だけを問うているわけです。それが続く限りは、やはり中学、高校の、特に正課の授業では難しいのかなと思います。つまり、自分で問いを見いだすということですよ。そういう訓練を受けてきていない。受けてきていないのだけれども、問題発見ということは日常生活の中でのいろいろな事態に直面してやっているはずなので、それを読書経験の中で意識するということが必要なわけですから、大学に入ってからでも、ある種、強制的にやらせればいいと考えます。私が先に取り上げました事例の荒井先生のものというのは、ここを読んできなさいと指定するだけで、ディベートするための問題は学生自身に見つけさせる。しかも、それがコンペティションになっていて、早く問題を見つけて、それが優れていた場合には、それをディベートということにより深められる。そういうチャンスが与えられるというふうにして、問題発見の習慣づけをするだけで、やはりかなり違ってくるのではないかという気がしております。



○**司会** 現在の大学受験の制度にも問題があるのではないかと。それから、それは大学に入った後でも、我々ができることがあるのではないかとということでしょうか。

ほかにフロアからいかがでしょうか。

### 質問3

○**林** 立教大学の全カリ事務室の林と申します。本日は貴重な話をありがとうございました。肥田先生にお伺いしたいことがございます。学生に限らず、読書人の育成のためには図書館の活用が非常に重要だということを改めて確認させていただきました。教育機関の図書館に限らず、地域の図書館の活性化が非常に重要ではないかなとお話を聞いていてあらためて確認しました。一方で、肥田先生のお話の中で、武雄市の図書館が、あのやり方ではいけないのではないかと、少し批判的なお話が少し意外でした。テレビや新聞ではかなり成功事例として取りざたされていて、利用者も増えているという意味では、読書人への誘いという点では成功しているのかなと思いましたが、どの点が問題として挙げられるのか、あるいは、地域活性化のための図書館のあり方は、こういったものが考えられるのかについて、もしお考えがあればお聞かせいただければと思います。



○司会 肥田先生、よろしいでしょうか。

○肥田 私ははっきり申し上げて、批判的なのです。今まで学校図書館の問題ばかりずっとやってきて、公共図書館の問題について勉強していなかったものだから、今回、武雄市の問題が出てきてびっくりしたのは、公共図書館のあるべき姿というのは、やはり来館者数で比べるものではないですよ。きちんとした資料が本当にその図書館にそろっているかということが一番大事でありまして、ベストセラーズをずらりと並べて客を呼んだところで、これは何もならない。無料の貸本屋になるわけですから、いけないと。

私がちょっと批判的なのは、選書の問題ですね。業者が入るということは、安い本は並べたくなる。もうかる本はですね。ところが、本当にもうからない、しかし、1冊でも置かなければいけない大事な本は、おそらくこれからだんだん選ばれなくなると思うのですね。ですから、その選書が本当に意図的になったりすると、困ると思います。

それから、あそこの場合、これはちょっと確かめていないから分からないのですが、借りた人にポイントをつけるというのですね。そのポイント料はどこから出るかと調べたら、どうも皆さんの税金から出るようなのですね。それでいいの



かどうかということもあります。

とにかく、やはりこの国で今まで公共図書館を利用する人が少なかった。そして、公共図書館を利用する人の中でも、どうあるべきかという議論が少なかったということが、今のとてもまずい状況というか、危ない状況につながっているなと思います。今、大阪でも、武雄市に倣いたいという市長さんが出てきているのですが、今それをやはりもう一回みんなで考え直してみようということで、フォーラムをやろうと思っています。なかなか向こうのスピードのほうが早いものですから、ちょっと困っています。

○司会 問題を確認いたしますと、公共図書館での選書のあり方というのでしょうか。業者を入れることでベストセラーが入ったり、あるいは、業者好みの図書になったり、あるいは、軽薄な本が入ったりということでしょうか。この辺のあり方について問題意識をお持ちであるということだと思います。

質問ばかりでなくて、今までのご意見に対してのコメントなりでも結構だと思いますが、いかがでしょうか。



**質問4**

○**学外からのご来場者** \*\*大学の\*\*と申します。冒頭に小澤先生から、大学生の蔵書の少なさというので、2冊という話を聞いてびっくりしました。原因は何でしょうか。少なくとも、今、中島先生からは、この領域別Bで1冊にしる読ませているわけですよね。しかもおそらく買わせていますよね。だから、大学生になってこのコースをとりますと、4年間で最低数冊は確保されると。教科書も含めての話ですけどもね。さかのぼって、これは1年生なのか、2年生なのか、その辺が分かりませんが、私も学生を教えていまして、いろいろ紹介はするのです。特に、30年、40年前に出たソニーの盛田昭夫さんの『学歴無用論』、学生の目が光るのですね。学習意欲が低い学生が多い大学ですから、学歴無用と言われますと、おっとという形で光りました。ですから、「ウェブで買えば1円で買えるよ、送料は250円だよ、買ってごらん」ということを言って勧めてはいるのですが。少なくともこの2冊というのが、立教大学でありながら、これはどうしたことかなというので、その背景というのはどういうものなのでしょうか。





○**司会** 予期していなかったかもしれませんが、小澤先生、ご指名でご質問ですので。

○**小澤** ご質問ありがとうございます。事実としては、1年生で、2冊のうち1冊は教科書でした。もう1冊は別の本というのが実態で、少し聞いてみたのです。やはりちょっと2冊だと心配でしたので。これからこの学生はどうなるのだろうと思って聞いたら、「本は買います。でも、すぐに売ります」と言っていたのですね。だから、店名はあれですが、買ったものは古本屋さんですぐに売ってしまうと。なので持っていませんと言われてしまいました。

○**司会** なるほど。蔵書を持つという感覚がなくなりつつあるかもしれないですね。買って読んだら売ってしまうのでしょうかね。あるいは、買うということに対して優先順位が低いのかもかもしれませんね。ほかに買いたいものがあるのかもしれませんが。

ほかにいかがでしょうか。では、寺崎先生、お願いいたします。



**質問5**

○寺崎 調査役の寺崎と申します。先ほど中島先生のおっしゃった第2番目の点に非常に共感いたします。つまり、学生たちに本を読ませるには、日本では2つの猛烈なハンディキャップを負っていると思うのですね。第1のハンディキャップは、先ほどからたびたび出ていますデジタル化。デジタルなメディアに対してどう応えるかという問題があります。それはやはりペーパーメディアとしての本をあちこちで圧迫していると思います。それはやはりとても大きな問題ですが、今、それにはふれません。先ほど先生がおっしゃったように、高校までの勉強の中で本を読まなければいけない、読んだほうが良いという経験をほとんど持っていないということなのですね。これはもう一大ハンディキャップだと思います。今後どうなっていくか分かりませんが、試験問題を変えていくとか、そういうことではたぶん収まらないだろうと思われるのですね。

ある夏、私のうちで1カ月間、アメリカからの高校生を預かりました。ホームステイをいたしました。その彼が持ってきた荷物のうちの1つは、大きな柳行李でございまして、それは全部、普通の我々の言う教養書でいっぱいなのですね。ペーパーバックのようなものではなくて、もっと本格的な英語の本です。それを全部見ると、文法に関する本、その他、歴史に関する本等々いっぱい入っていま



立教学院調査役、大学教育開発・支援センター 顧問 寺崎 昌男

---

す。どうしたのかと言いましたら、彼はもうその年の秋から高3になるのですけれども、「これは、私の行きたいと思う大学から、きみは本の読み方が足りないとされたので持ってきた」と。彼が夏休み中にやったことは、問題の練習とか参考書ではございません。その本を読むことでした。結局そういう経験をしている学生と、していない学生では致命的に違うと思うのですね。

一部の新聞で伝えられたように、高1から高2にかけて、今のセンターテストを解体して累積していくと。もしあんなことが起きたら、ますます各学年で読書などはしなくなると思います。そういう点では、やはり我々はもっと大学の立場から高校に対して要求していいことというのは、実はいっぱいあるのではないのでしょうか。そのように感じました。

○**司会** コメントということでよろしいでしょうか。立教大学でも秋入試で決まった高校生に対しては、入学までに読んでおくようにという推薦の本のリストを各学部で用意して配布していると思います。ただ、どれぐらい読まれているかというのは、こちらもなかなか把握できなくて、たぶん学部によっては感想文を出させるとか、そういうことをやっている学部もあるかと思えますけれども、なかなか把握できていないのが実情ではないかと思っております。

もし先生方、何かコメントがあれば。安藤先生、いかがでしょうか。

○**安藤** 本当に読む学生は向こうからこちらに尋ねてきて、「何か面白い本はありますか」とメールなり直接なり聞いてくるのですが、やはり読まない学生というのは、先ほども本を買ったらすぐ古本屋に売ってしまうという、蔵書を持たない学生の話もありました。本当に自分の手元にあまり本を持たないわけですね。先ほどなだいなだと中江兆民の話を紹介しましたが、あの2つは新書なので、600円、700円程度のものなのですが、授業には結構まじめに参加していた学生でも、図書館で借りてきて持ってきたりしていて、すごく衝撃を受けた覚えがありました。もちろん3,000円、4,000円のをしょっちゅう買わせるというと、人によっては経済的に負担が大きいということもあるかもしれませんが、やはり新書とか文庫に関しては、買ってもいいのではないかなと思うのですが、どうもちょっとそこは感覚が違うようです。そういった学生に、蔵書を持つことや、本を読み続けていくことの価値をどういう風に伝えていけるのかという

のは難しいところですが、やはりそこがこれからの大学教育には問われているのかなと思います。

○司会 ありがとうございます。確かに文庫、新書でも買わないようで借りるということをするようですね。

そろそろ時間になってきましたので、最後にそれぞれの登壇している先生方に一言ずつコメント、意見などをいただきまして、終わりにしたいと思います。

私のほうから一言言わせていただきますと、肥田先生のお言葉で、教員のほうに読書に誘う力がないのではないかとこの点がありましたけれども、非常に耳が痛いご意見で、実は私も毎週のゼミで1冊ずつ学生に読んでほしい本を紹介しているのです。古典の場合が多いですが、そのときに話題になった本なども紹介して、自分で勝手に「今週の1冊」と称しましてやっているのですが、実はだんだん反応が悪くなってきているという印象を得ています。10年ぐらい前ですと、卒業する際に、「先生の紹介した本を全部読みました」という学生がいたのですが、最近はどうも推薦していても、その反応がよくなくて、これはたぶん読まないなと感じながら推薦していることがあります。もしかしたら、こちらの推薦する熱意が弱くなってきているのかなという反省も含めているので



すが、教員の読書に誘う力が問われるのだなと、最近もよく感じております。

この後、先生方、一言ずつご意見あるいは感想をいただければと思います。中島先生から、いかがでしょうか。

○中島 いかにも本を読ませるかというのは、ある程度、集中的に読書の経験をすれば、その面白さ、楽しさは必ず分かるものだと思います。ただ、その経験をしていない。どうやってさせるか。このお酒はおいしいから飲んでごらんと言っても、酎ハイやビールに慣れた学生に年代もののワインをいきなり勧めても、そう簡単にはのどを通らないだろうし、やはり経験を積むしかありません。最初は不純な動機でもいいから、とにかく見栄を張って本を読んでくるというね。昔の大学生は書棚に難しい本をたくさん持っていたのですよね。今は逆で、難しい本が本棚にあると、「この人暗いわね」ということでもてない。そういうふうになってしまっているから、それを逆転させるには、やはり相当荒技が必要で、先ほど最後の例に挙げましたように、難しい本を読んできて、ディスカッションで格好いい振り舞いができればということでもいいから、とにかく読ませるということに知恵を絞らなければいけない時代なのかなというのが、私の結論です。



○司会 ありがとうございます。安藤先生、いかがでしょうか。

○安藤 やはり読む大切さをどう伝えていくかというところで、今の学生はネットにはしょっちゅうアクセスするし、スマホもずっと携帯していて、情報や知識にはかなりアクセスできていると。玉石混交あるとはいえ、いろいろな情報や知識には絶えずふれていると。ただ、それをどういう風な視点で処理していくか。あるいは、そういったものに関して、自分に何か判断が迫られたときにどうやって判断していくか。やはりその力をつけるのが読書なのだとことを伝えていけるような大学教育を目指さなければと思っています。

場合によっては、ネットと読書というのを、水と油のように相容れないものとしてとらえて、お怒りになる声もあるかもしれませんが、僕は別にその2つはそんなに相容れないもの、けんかするものではなくて、やはりツールとして使い分けていくものだと考えています。ネットやスマホなどを使って楽しんでいる学生に関して、そこでは得られない楽しみや貴重なものが、実は読書から得られるのだと、うまく伝えていけば彼らも気づいてくれるのではないかなと思っています。そういう授業を自分でもできればと思うのですが、なかなか。私もわりと教員でも若いほうだと思うのですが、それでも結構ジェネレーションギャップみ



たいなものをすごく感じていて、なかなか難しいところではあります。

○**司会** ありがとうございます。肥田先生、何か一言いただければと思います。

○**肥田** つい最近ですけれども、ネットでつづやくと炎上するぐらいみんなから攻撃が来るといふ。あれを見ていると、もちろんネットで情報を取るのはいいのだけれども、ネットで取るだけの言語力がついていないという。これはしみじみ感じますね。ですから、あそこを書いて出した言葉が、今一瞬にして世界中に伝わるということについて、もう少しみんな考えて、言葉を大切にすることをしていただければいいと。そうなりますと、私どもの機構の評議員や理事であります大企業の入社試験から変えてほしいと、私はお願いしているのです。入社試験が変わると、大学入試も変わってきますし、高校入試も変わる。ですから、一番その出口というか、人生の入り口である入社試験を、まずどうやって変えたいのかな、変えられるのかなというのが、私の今の最大の悩み事で、答えがないという状況でございます。



○**司会** ありがとうございました。結論の出る話ではないのですが、皆さん、ありがとうございました。話題は尽きないかもしれませんが、質疑応答、ディスカッションの時間はこれまでとさせていただきたいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。



## 閉会挨拶

○**司会** 最後に、閉会の挨拶として、今回、このシンポジウムを主催した大学教育開発・支援センターのセンター長、副総長でもある西原廉太先生にお願いいたします。

○**西原** 今ご紹介にあずかりました、大学教育開発・支援センターのセンター長、また、教育改革推進会議の推進責任者をしております副総長の西原廉太と申します。今日は3人の先生方、本当にどうもありがとうございました。大変貴重なお話を伺いまして、また、その後のディスカッションも大変有意義なお話をいただけたことを、心から感謝申し上げたいと思います。ことに肥田美代子先生のお話を伺いながら、教育といいますが、その基本の「読む」ということの意味を、あらためて私どもは確認できたと思います。

肥田先生は、皆さんご承知のように、国会でも長くお働きになられましたし、私にとりましては、個人的な話で申しわけないのですが、肥田美代子先生の書か



大学教育開発・支援センター センター長、副総長、文学部教授  
**西原 廉太**

れた童話ですね。ことに阪神淡路大震災の後に書かれた『ゆずちゃん』という童話があって、これは阪神淡路大震災で命を奪われた女の子をテーマにされた童話ですが、その童話を私はとても大事にしております。東日本大震災があった後も、何度も読みながら、自分自身涙があふれてたまらなかったですし、その『ゆずちゃん』を、大学生も含めて読み聞かせをいたしました。先ほど安藤先生が、本当に良質な本は決して消費されないとおっしゃいましたが、まさにそのようなご本だった。そういうところから、今日のお話がつながっているのかなと、あらため

て感謝をもって伺った次第でございます。

お話を伺いながらちょっと触発されて、脱線して恐縮なのですが、私は文学部のキリスト教学科の教員でございます。立教大学はキリスト教に基づく教育をすると寄附行為にも書いてあるわけですが、アメリカの聖公会、英国の国教会系の教会ですが、そこによって創立された大学です。キリスト教ないし聖公会がことに大事にしている聖書の箇所があります。それは、ヨハネによる福音書の1章14節なのですが、<sup>ことば</sup>「言」が私たちの間に肉となって宿られたという箇所です。すなわち、「言」が肉となる経験というもの。それは、実は立教大学の建学の精神と深くつながっているわけでございます。

立教大学はリベラルアーツを大事にしている大学なのですが、そもそもリベラルアーツの源流は、12世紀、13世紀のオックスフォードやケンブリッジにつながるわけです。その中で、ずっと考えられてきたことは、この世界には神が書いた2つのテキストがある、ということです。第1のテキストは聖書であり、第2のテキストは自然や宇宙や人体であると。私たち、学ぶものの責任は、神が書いたテキストである聖書を読み解くことであり、世界や社会や人間といったテキストを読み解くことによって普遍的なる真理を探究することである。それは、実は今もって、ことにキリスト教や聖公会につながる立教大学が、本当は大切にしなければいけない原点だと思います。

そういう意味で、本日伺いました「読むこと」の意味を、あらためて私どもの建学の精神や教育の基礎としてもう一度再設定することが必要なのだろうと思えました。2016年に始まる新たな学士課程のカリキュラムを、今、鋭意、全学で検討中でございますけれども、本日の貴重なお話と、その後の議論をこの検討作業の中にしっかりと組み込んで、「肉」としてまいりたいと思えます。

本日はまことにありがとうございました。(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。それでは、これで今日のシンポジウムを終了させていただきます。皆さま、どうもありがとうございました。

●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学  
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック  
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待  
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る  
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開  
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育  
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議  
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告  
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする  
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方  
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2  
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)

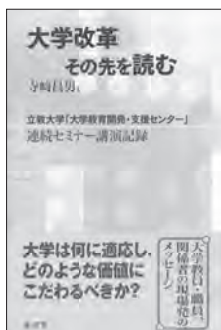
**NO.15** 学位取得へ導く大学院教育のあり方  
—博士後期課程を中心として— (2012年)

**NO.16** 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)

**NO.17** 学びが高まる学習環境とは  
—ハード、ソフト、コミュニティー— (2013年)

**NO.18** 大学院研究指導への誘い<sup>いざな</sup>  
—海外マニュアルの紹介— (2013年)

## ●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)  
東信堂 ¥1,300

大学教育開発研究シリーズ NO.19

## 「読む」学生が育つ大学教育を求めて

—若者の読書実態と授業実践を始点として—

2013年10月発行

---

### 発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail : [cdshe@grp.rikkyo.ne.jp](mailto:cdshe@grp.rikkyo.ne.jp)

### 制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY